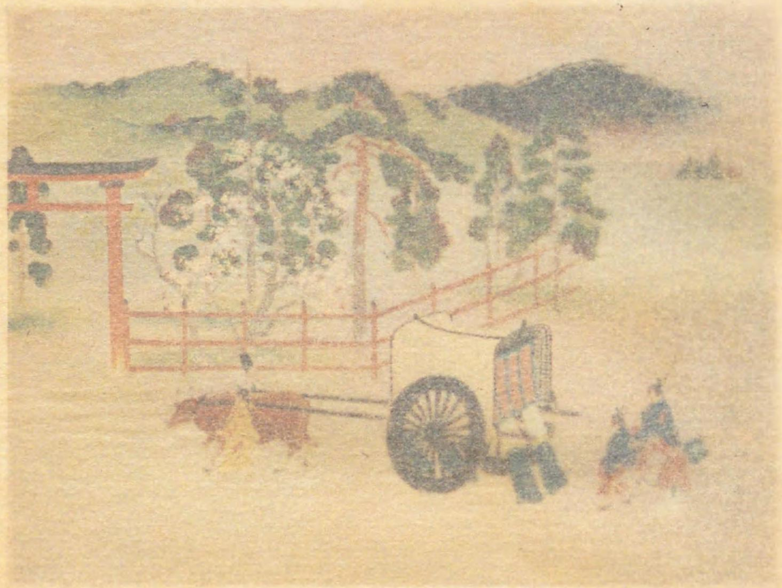
382.19
Y529k
O
00219124

柳田國男著

海南小記

東京　大岡山書店發行



382.19
Y529k
Q

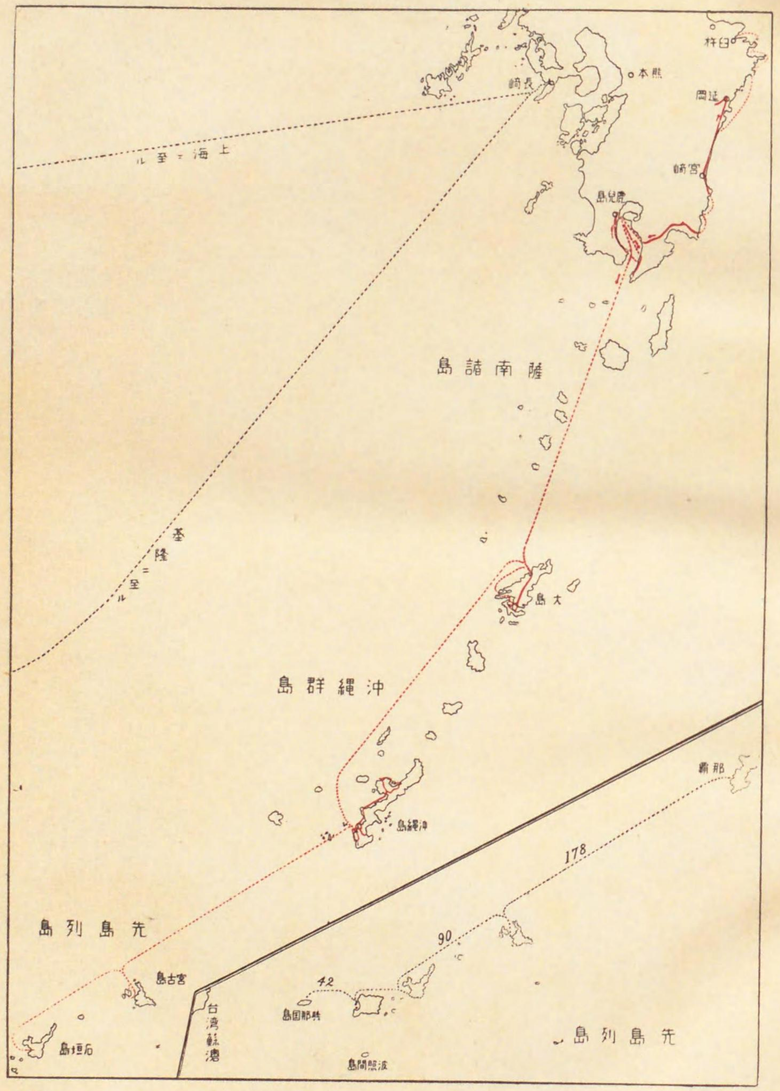
国立国会
25.12.4
図書館

219124

382.19
Y529
Q

国立国会
25.12.4
図書館

219124


上海ヲ至ル
陸ニ至ル
島諸南薩
島群繩沖
島列島先
島列島先
本州
鹿兒島
宮崎
延岡
日向
大島
沖繩島
宮古島
石垣島
台灣航路
島南鳥
島南鳥
178
90
42

序

ジュネヴの冬は寂しかつた。岡の並木の散り盡す頃から、霧とも雲の屑ともわからぬものが、明けても暮れても空を蔽ひ、時としては園の梢を隱した。月夜などは忘れてしまふやうであつた。木枯も時雨も此國には無かつたが、四五日に一度づゝ、ギーズと云ふしめつた風が湖水を越えて西北から吹いて來て、その度毎に冬を深くした。寒さの頂上と云ふ頃には、或朝は木花が咲く。其時ばかりは霧がすこし薄れて、山の眞白な雪が見え、日影がさして、鳥の姿などが目に映じた。

遠い東南の虹鮮かなる海の島と、島で行逢うた色々の人と、その折の僅かな旅の日記とを、それからそれへと思ひ出すのは、斯ういふ日の午後の散歩の時であつた。自分以外にたゞ一人だけ、沖繩と云ふ島を知つて居る人が、同じこの町のしかも同じ丘に、わづか五六町を隔てゝ住んで居るのだが、それを知りながらも訪ねて話をすることの出來ぬのが、ことに堪へがたい旅人の無聊であつた。

日本では誰知らぬ者も無いチェンバレン教授である。如何した心持からかジュネヴに來て、人に忘れられつゝ靜かに老いんとして居る。家はルッソオ舊居の近くに在つて番地までも自分は知つて居た。先生はラフカディオ・ハアンよりもたしか三つ四つ若かつたからまだ七十には大分間がある筈だ。ひどく眼が惡くて、其眼は腦から來て居ると云ふことであつた。强ひて面會を求める手

紙を出した者もあつたが、病氣に障るからと云ふ代筆の斷りが來たさうだ。秋の初のまだ暖かい頃までは、それでもジャルダン・アングレェの樹蔭水の滸を、看護人に伴はれて逍遙して居られるのを、見かけたと云ふ人も幾人かあつた。そんなら自分もよそながら一度はと思つて、折々靜かな午後などに往つて見たこともあつたが、終に目的を達せずして冬になつてしまつた。

ジャン・ロミウと云ふ日本ずきの青年工學士は、サン・ピエル大寺の横手の古本屋で、先生舊藏の若干の和書を買入れた。之を聞いて自分たちも往つて見たが、もう大部分は賣れてしまつて、一冊の日本口語文典だけが殘つて居た。有名な先生の自著であつて、しかも澤山の書入が有るのは、疑も無く覆刻の準備であつた。同行の藤井悌君が心を動かして、値段に構はず購つて還つたから、此本ばかりは久しぶりに、再び日本の光を見たのである。

日本と此學者との因緣は竝々でなかつた。日本に生れて一生を勉强したものにも、チェンバレン氏だけの蒐集と述作とを、遺し得た者は多くなかつた。我々が今頃少しづゝ、必要を唱へて居る土俗誌の研究に、彼は遠國から來て三十年前に手を著けた。アイヌ民族の言語に就ても、大なる感謝は彼に屬する。殊に琉球に至つては、母方の祖父、船長ベシル・ホールの曾て訪ひ寄つて、なつかしい見聞錄を世に留めた島である。其孫に取つては家の學であり、由緒ある研究であつた。定めて人知れぬ愛著を以て、學問の成長を希うて居たことゝ思ふのに、あの後先生の跡を踏んで、之を敷衍しようとした者が無いばかりか、不本意なる若干の小誤謬までが、今に其儘にして棄てゝあつて、本だけが所謂珍本と爲つて、讀みもせぬ人の本箱の底に、追々と隱れて行く。先生の今の境遇を知る者には、是は言ひやうも無い寂しさであつた。

運命は此の如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族が大移動を記念すべき、有形無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今尙聊かも衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が、著しい影響を與へた部曲組織宗敎觀念、乃至は藝術樣式の島々の特色が、從來曾て見ない强烈なる興味を、諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の討査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰かもこの疲れたる老學者が其生涯の學業を切上げた際であつた。是から大に興らうとする新機運に向つては、彼は只一箇有益なる資料たるに止まり、其計畫と希望とには、もう參加することが出來ないのである。況やこの北太平洋の一角に於て、漸く今始まつたばかりの若々しい運動、卽ち島に生れた者自らが、島と島との生活の連鎖を、昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛

した日本であり、且つ先生の感化が暗々裡に、働いて居たことは確かであつても、其悦びを我々と分つことが、最早出來ない迄に弱つてしまはれた。以前先生が名を聞きながら、手を著ける機會を得なかつた「おもろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて、今現代に蘇らうとして居る。之を沖繩一島の寶と羨むに止まらず、此の如き信仰歸依、此の如き情緒を、島に家する者の祖先の心裡に、漲り溢れしむるに至つた最初の力が、獨り血を共にする大八洲の國々のみならず、同じ大海の潮に育まれて、北と南とに吹分けられた、遠い沖の小島の荒えびすの胸にも、尙一樣に感じられて居たのでは無いか。之を推究しても らひたいのが引續いての我々の願であるが、久しい孤立に馴らされて小さな陸地を國と名け、渚から外をよそと考へた人々の、離れ〴〵の生涯の勞作が、果していつの世になつたら、融け合うて一箇の完成と爲るであらうか。斯ういふ

外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレッタンティズムの、罪深さを感ぜざるを得なかつたのである。

海南小記の如きは、至つて小さな咏歎の記錄に過ぎない。もし其中に少しの學問があるとすれば、それは幸にして世を同じうする島々の篤學者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して、表現したものに他ならぬ。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り揚げたる、歴史的差別を標準とはすること無く、南日本の大小遠近の島々に、普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て、人間の無用なる鬪諍を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に、入らんとするだらうと信じて居る。然らば又事業

は微小なりと雖、やがて咲き香ふべきものゝ蕾である。歌ひ舞ふべきものゝ卵である。乃ち新しい民族學の南無菩提の爲に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂に供養し奉る。

大正十四年四月八日

柳田國男識

目次

序
海南小記
一　からいも地帶……一
二　穗門の二夜……八
三　海ゆかば……一四
四　ひじりの家……二〇
五　水煙る川のほとり……二七
六　地の島……三三

七　佐多へ行く路……三九
八　いれずみの南北……四五
九　三太郎坂……五一
一〇　今何時ですか……五七
一一　阿室の女夫松……六三
一二　國頭の土……六九
一三　遠く來る神……七四
一四　山原船……八〇
一五　猪垣の此方……八六
一六　舊城の花……九二

一七　豆腐の話……九七
一八　七度の解放……一〇三
一九　小さな誤解……一〇八
二〇　久高の屁……一一九
二一　干瀬の人生……一二四
二二　島布と粟……一三四
二三　蘆苅と竈神……一四〇
二四　はかり石……一四五
二五　赤蜂鬼虎……一五一
二六　宮良橋……一五六

二七　二色人……一六一
二八　龜恩を知る……一六六
二九　南波照間……一七一
與那國の女たち……一七九
南の島の清水……二〇三
炭燒小五郎が事……二三三
阿遲麻佐の島……三一三
附言

挿畫

口繪（遠き海より都へ、松岡映丘君）
那覇の湊の船（本山桂川君）……八三
場天の沖にかゝる船（同上）……八五
豚を賣りに來る女（繪葉書）……八九
路傍の豆腐、與那原にて（本山桂川君）……九九
同じく宮古島にて（同上）……一〇一
白くして美しきもの（松田賀直君）……一〇三
糸を綜る宮古島の女（本山桂川君）……一三五

布を織る八重山の女（同上）……一三六
石敢當の在り處（同上）……一四六
國頭のビジュル石（折口信夫君）……一四八
宮良橋と萬年青岳（岩崎卓爾君）……一六〇
海を見る與那國の女たち（本山桂川君）……一八九
物を搗く同じの女（同上）……一九五
與那國の母（同上）……一九八
久高島の外間ノロ（折口信夫君）……二三三
鐵以前からの農具（伊波普猷君）……二八六
屋古の嘉手志井（魚住淳吉君）……二八八

首里御殿の火の神（三上永人君）……二九〇
石垣藏元の火の神（同上）……三一一
沖縄の蒲葵（繪葉書）……三四三
蒲葵の葉の陰の巫女（三上永人君）……三四九
宮島御嶽の奥（同上）……三五八
與那國の蒲葵（本山桂川君）……三六三
コバ蓑を着たる少年（同上）……三六九
日向の青島（繪葉書）……三七八

地圖

豐後から八重山まで（巻頭）
海部二郡の海岸……一四
日向の東南隅……三六
佐多岬附近……四四
菴美大島と佳計呂麻島……六八
國頭の山と島……九〇
首里附近……一二八
宮古諸島……一三八
八重山諸島……一六六

（地圖及裝釘　早川孝太郎君）

東京都立中央図書館蔵書

海南小記

一　からいも地帶

尋常五學年の讀本の中に、

甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋（カライモ）トイフ。名稱ノカク異ルヲ以テモ、此芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

とあるのは、ほんの些しばかりだが間違つて居る。琉球では甘藷を唐芋と謂ふ

者は無く、一般に之をンムと呼んで居る。ンムは即ち吾々のイモと同じ語である。カライモ又はタウイモと云ふ名は、弘く南九州一帶に行はれて居る。從つて薩摩でも之を琉球芋と呼ぶことはない。琉球芋と謂つたのは九州の北の一角から、中國上方に亙る大區域であつたが、後漸く標準語のサツマイモに改まつて行くやうである。

此類の誤は、子供たちにもよく判ることだから、單に其地方だけの爲にならば、之を訂正する必要は無いかも知れぬ。只氣になるのは之で以て、甘藷は南方よりと謂はずに、西方より傳來したとする推理法である。何となれば薩摩も琉球も、日本の南部である上に、甘藷は更に其南方の、南支那から輸入して來たことが確かだからである。

以前奥州などの田舍の料理には、所謂薩摩芋は椎茸や蓮根と、同等以上の待

遇を受けたものだ。それが運送が手輕に成つたばかりか、氣仙あたりの島や半島に迄、とう〳〵之を栽培するやうに爲つた結果、大分近頃は平凡化しようとして居る。之に反して關東の大都會には、八里半の名聲遠く轟き、青木昆陽の墓の前に、燒芋屋の組合が感謝の祭を營むやうな時代が來た。遠州御前崎附近は又事情が別で、薯種を輸入した大澤權右衞門の記念碑は、薯切乾生產業者等が、主として其建設の爲に奔走したやうである。同じ薩摩芋地帶の僅か數十年の歷史にも、よく見ると是だけの變化が有る。況や當初此物を沖繩に齎した野國總管、夫をヤマトに招き入れた薩州兒水の繼川利右衞門、之を中國へ傳へた石見の薯代官井戸平左衞門等の、二百年前の心持では、果して今現に生じて居る社會上の効果の、どれだけの部分迄を豫期して居たものであつたか。到底吾吾「おさつ」階級に屬する者の、完全に理解し得る所では無いやうに思はれる。

自分は考へる。少くとも是だけは意外の効果では無かつたか。甘薯考其他のプロパガンダを見ると、主として不作の年の百姓飯米の補ひ、或は島の流人等が飢を救ふのを以て、藷の恩澤の至極と認めて居た樣である。それが今日では隨分宏大な地域に亙つて、凶年でも無い年に流人でも無い人々が、必ず作り必ず食ふ農作物と成つて居るのである。斯の如き生活上の變化は、正しく大事業である。而も二百何十年の歳月より他には、誰が企てゝ、之を爲し遂げたと云ふ人も、別に無かつたのである。

カライモ地帶を旅行して見ると、又新たに國の運命と云ふやうなものを考へさせられる。海近く日の暖かい唐藷畠の一部分は、曾ては疑ひもなく浦人の粟(あは)生豆生(ふまめふ)であつた。こんな雜穀類の調製が面倒で、一人分を養ふ面積の多く入用なものより、甘いだけでも唐藷の方が好ましいのに、世話も入費も概して少なく、凶作の患もずつと減じ得る。沖へ出て行く舟の辨當には、片手で食へるから便利だと云つた婦人もある。かう云ふ考が元になつて、日本人なれども永年の箸と茶碗に分れ、薯の食事を常とする樣になつたのである。而も所謂港田の遠く拓かれ、清水豐かに之を灌ぐやうな濱方に於ては、必ずしも急に此生活に移らなかつたのは、何と謂つても米に勝る食物は無いからである。水に乏しい岬や島の磯山の陰で、以前は多分に人を住ましむる望も無かつた畠場が、此唐芋の輸入に由つて、初めて或意味に於ける安樂郷と爲り、瞬くうちに今日の如き人口密集を見たのである。甘藷先生と其先進とが若し出なかつたら、此等の海岸の岡は今尙萱立雜木立のまゝで、而も吾々は夙に國内に溢れて居たであらう。勿論大に苦悶しつゝも、既に餘程の人數を他國に出して居り、この所謂民族主義の時世に出くはして、今更移民問題に行詰まるやうなこともなかつたで

あらう。實際この小さな島國の山國に、五千九百萬人を盛り得たのは、一半は卽ちカライモの奇蹟である。或は激語してカライモの災と謂つた人さへあるのである。

諸から米への代用食奬勵は、成績を擧げにくい事情が少しばかりある。なあに魚類さへ澤山捕つて食へば、營養には心配が無いと誰かは謂つた。或は又此頃の景氣なら、米を買つて食へぬことも無いが、それよりも薯で我慢して居つて、酒を澤山飲んだ方が幸福だと、謂つて居る人も有るさうだ。さうかも知れぬが其我慢だけは女房や子供にさせ、酒は亭主ばかりが飲むのである。此の如き分配上の慣例は、默つて見ては居られぬやうな氣がする。

豐後では甘諸をトイモ又はタウイモと謂ふ。而も此邊は既に自分の謂ふ唐芋地帶に屬して居る。日隅薩の海添には、水に乏しい磯山の陰にも、薯に由つて

多くの小樂天地が出來て居る。海南奄美(あまみ)の列島に渡れば、薯をトンと呼ぶ人々と、ハヌス又はハンスと謂ふ人たちとが、相接して住んで居り、其南は卽ち沖繩のンム地帶である。更に南すると、之をアッコン又はウンディンなどゝ稱する先島(さきじま)の諸島があるが、生活の條件は互に頗る相似て居る。南北三百何十里、中を隔てて廣漠の海がある。薯を此間に傳播し遂げたのは、果して皆偉人の力であらうか。或は又人間の安く活きる必要が、一部分は之を手傳つて居るのでは無いか。自分は今でもまだ之を疑つて居る。

二　穂門の二夜

近いうちに土佐の沖へ鮪釣りに出る支度に、臼杵の町へ買物に來た機動船に便乘して、風の寒い午後に保土の島へは渡つた、島の郵便局長の家に、此頃買求めた船であつて、前からの機關手の若い朝鮮人がまだ乘つて居る。他の乘組は何れも島の者で、自分などには解らぬくらゐの內地語で、何か此故參の青年に對して小言を謂つて居る。而も極度に懇切なる人々であつた。又も來られまい、ゆつくり遊んで御出でるがよい。明日は保土の村の夜乞です。小さな神樣が御降りになるので、など、謂つてくれる。夜乞とは祭の夜宮のことである。祭禮のことを神の御降りと、まだ此島では謂つて居るのである。

斯んなうれしい島にならば、海が荒れて閉込められても本望だと、只ちよつ

と考へて見たばかりで、もう早其通りに爲つて居た。船が着くと僅な防波堤の陰には、早色々の小舟が避難して居る。正面の口からは、波がだぶり〳〵と入つて來る。地方の山は一圓の潮曇りであつた。あくる朝も裾を飜へす程の風が西から吹いて居た。對岸の四浦の鼻は手の屆くほど近いが、此間はいつも潮が惡いのでよく船が覆へる。とても今日は渡されぬと謂ふから、仕方なしに今一夜とまることにして、それから何遍も村の中をあるいた。全體に平地はちつとも無い島である。見上げるやうな傾斜地に、同じ樣な家が境も不分明に建て續けてある。二階と下と別々に、入口を路へ附けて、二戸三戸が一棟の中に住んで居る。肥前の鳥栖から來た藥屋がこんな事を謂つた。よほど氣を付けぬと、同じ家へ二度入つて笑はれると。なほ今一段と不必要な訪問者に對しては、おまへは先程も來たでは無いかと謂ふと。本當にさうかと思つて、慌てゝ還つて

行くと村の者も謂つた。

家は近年に爲つて大分增加したものらしい。今でも行當るほど子供や女の數が多いのに、もう半月もすると壹岐五島の方から、三百何十人の男たちが、漁を終つて戻つて來る。其時だけは眞に寢る所も無いさうである。だから半分は人の家に往つて寢る。それを又樂みにして待ち待たれる若い者が多い。役場の當直室などもやはり借りられる。借ると謂ふよりは單に蒲團を持つて來て休むので、つまり島一つが大家內の一家のやうなものだ。だから其間に挾まつた旅の者には、居心地は決してよくない。

水は四百足らずの竈から、殆ど唯一つの寺の後の泉を汲んで居る。誠に感謝に價する清水であつて、爰でもやはり御大師樣水と名け、而も其由來はもう說明し得ぬやうに爲つて居る。此靈泉の一つの缺點は、水量が人口に比例して增

して來ぬことである。今日の風が雨に爲らぬやうだと、二三日の中には番を附けて、順番で汲ませねばならぬと謂つて居た。尤も風呂の水だけは別にあるが、幾つかの錢湯では祭の日のせいか、いつも裸の人の方が湯の量よりも多い。處處の井戸では洗濯をしながら、女たちが水の湧くのを待つて居る。かと思ふほど水が少ない。

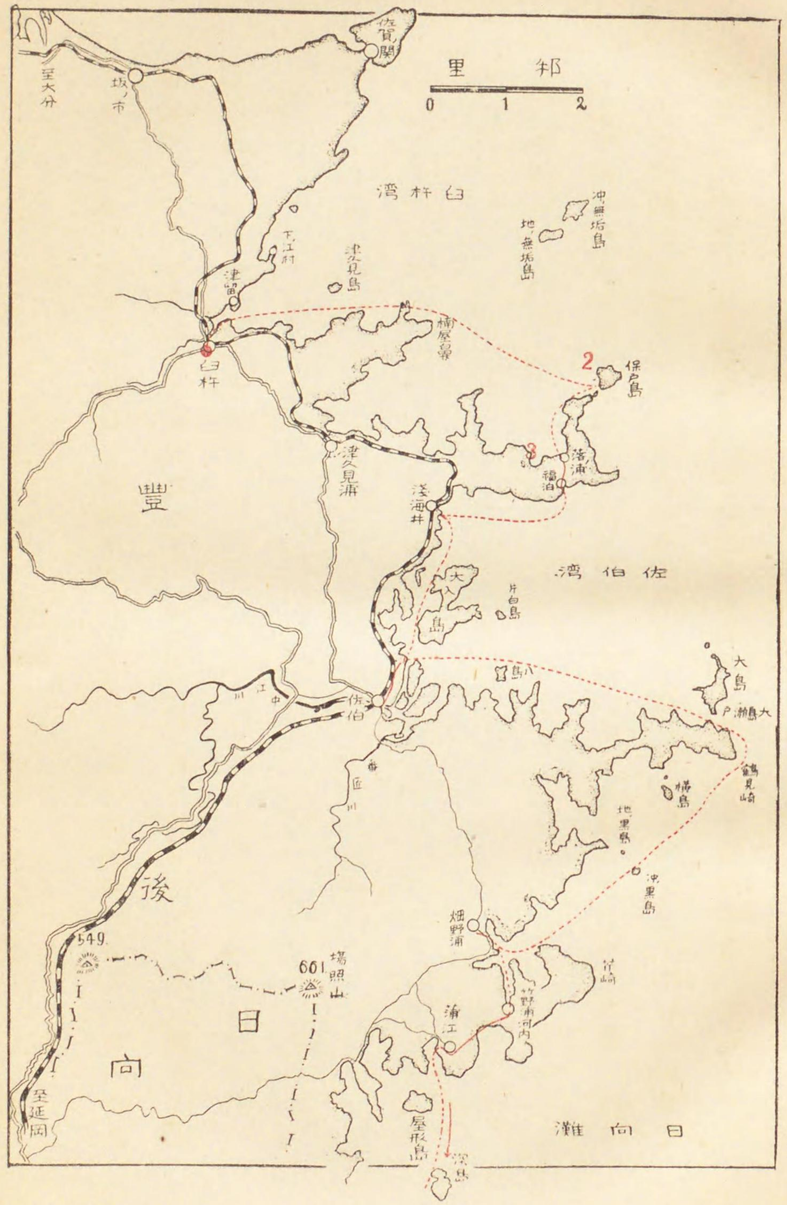
時々は船に桶を乘せて、四浦へ汲みに行くさうである。燃料に至つては殆ど全部を外から持つて來ねばならぬ。周一里餘の島は、見た所九分通り畠で、タウイモばかり作るかと思ふ程だが、夫でもまだ足らぬと謂ふ。野菜は自分たちと相乘りして、昨日も澤山輸入せられた。島には何としても作る餘地が無いのである。段々畑の頂上には、それでも泉を養ふ少しの林が有る。其左手の小さな森は以前の物見所で、登つて見ると中には島人の墓がある。樹の間から伊豫

の山が見え、又水之子（みづのこ）の燈臺が見える。島の東側もやはり皆畑で、裾の方には四反ほど水田もあり、小舟で島をまはつて之を耕しに行く。之に灌漑する池もあり、折々はそれでも鴨が來て遊ぶ、又海岸の岩の陰には河童も居る。友達の聲をして寺の和尚を夜中に喚び起し、朝の勤めの木魚を叩かせたと云ふ話もある。狸も何處から渡つたか夫婦二匹だけは居た。其一匹が殺されて、他の一つが大に荒れたことがあつた。

こんな話を聞きあるいて、夕方に宿の郵便局に歸つて見ると、あの朝鮮人は青い仕事着のまゝで、にこ〳〵と藁仕事をして居る。宵祭の馳走がまだ調はぬうちから、三四人の老女たちがもう遊びに來て居る。賀茂樣の森には燈明がともつて、太鼓と石段の下駄の音とが聞える。ごろりと横になると、空には雲があるいて居る。終日白く騷いだ海面が、誰にも顧みられずに暮れてしまふ。其

うちに下からは、婆さんたちの歌の聲が聞えて來る。伊勢踊と云ふさうだが、間（ま）の延びた伊呂波歌で、弘法大師の事を作つたものらしい。大層調子が揃ふなと思つて覗いて見ると、團扇を叩きながら二人踊つて居た。それから又大に笑ひ、今度は別の歌である。若い後家なら何とかだと歌つて居る。あれは私が可愛さうだから、元氣を附けてやると言つて歌ふのですと言ひながら、室を片付けに來た未亡人は、改めて又眼を拭つて居る。斯う云ふ生活も保土の島には有つたのだ。

次の朝は天氣であつたから、思ひ切つて小舟を下（おろ）させた。すると此婦人を初め二三の島の人が、今日の祭の案内に、四浦の村々へ餅を持つて一緒に乘つて行く。出て見ると浪はまだ高いが、親類の客や土産の大根葱などを乘せて、もう戻つて來る島の船もある。自分の船にも夥しい重箱の包が有る。いつの間に



こんなに搗いたかと思ふほどの餅である。今日の船は餅船だ。あんた方は餅に便船したやうなもんだと笑ひながら、島の人は別れて浦々に上陸し、船には自分等ばかり淋しく殘つた。

三　海行かば

海で死んだ人の話を幾つも聞いた。越知浦（をちのうら）では霧の深い冬の或日の朝、村の某の手繰網の小舟が、からつぽで波に漂うて居るのを見付け、それから其附近で倅の二十三になる青年の、厚い綿子を着込んだ亡骸を引揚げた。此あけがた

に親子で出た筈と、熱心に捜し廻ると三日目に漸く、父親の方も淺ましい姿に爲つて出て來た。常からどうも頑丈とは謂はれぬ息子であつた。多分は櫓の綱でも切れて水に墜ちたのを、後先も考へずに助けに飛込んだものだらうと、今に同情の噂の種に爲つて居る。

船の扱ひは小さいうちから、親が敎へる習はしである爲に、折々此樣な情無い不幸がある。保土の島でも二三年前に、他の者より些し先に五島を出た、親子三人の船が戻つて來なかつた。別にひどい大荒れでは無かつたけれども、船が如何にも弱々しい古船であつた。仲間の人たちは蟲が知らせたか、之を氣遣はしがつて色々と忠告をした。もう僅か待つて皆と一緒に引上げようぢや無いか。何も一日を爭うて還るにも及ぶまいと謂つたが、どうしたものか仕事の都合が有ると、何でも構はずに出帆してしまつた。さうして永遠に何處へか往つ

てしまつたのである。此附近の村役場には大抵一件か二件、毎年の徴兵事務に際して、所在不明者の煩はしい手續を繰返さねばならぬ者がある。それが皆此類の、死んだに相違ない若者ばかりである。身寄や親しかつた人々には、死んだ者よりも猶一層の苦痛を與へる。明かに死んだ者には年忌が有る。假令其時は胸が裂ける程に悲しみ慕うても、月日が立つうちには間が遠くなり、段々の祭や供養が自然の垣根を作つてくれる。之に反してどうして居るか分らぬ人々の幻の始末は、司法や行政の法規よりも更に面倒である。其を考へての思遣りでもあるまいが、漁師たちの方でも行方不明になることを、死ぬより以上の不幸と感じて居るらしい。船の綱は大切な物だ。是さへ有れば死んでも分らなくなるやうなことは無いと、自分を載せた船方なども謂つて居た。さうして又斯んな話もして居つた。

今からちやうど二年前に、臼杵の近くに在るセメント會社の工場へ、粘土を運んで來る伊豫の八幡濱（やはたはま）の船が、豐後水道で難風に遭つて、六人の乘組は悉く死に、船と共に大濱村の浦に漂着した。其人たちは皆船の綱で、しつかりと身體を縛り附けて死んで居たと謂ふ。郡役所の吉野君は之を臨檢に往つたから、よく見て知つて居る。今思つても涙が出ると謂つて居た。よく〳〵働いたものと見えて、六人ながら手掌の皮が剝けて居た。十五六に爲る少年が先づ斃れたかと思はれ、綱の一番細い處で船にくゝり附けてあつた。四人の若者も同じ綱に順々に結ばれて死んで居り、四十二三歳の船長は最後に最も簡單に、太い繩で只一重だけ、腰の周りをゆはへて居たと云ふ。こんな立派な覺悟は此仲間でもまだ見たことが無い。一切の帳面と書付類、それから濡れては居たが三百何十圓の紙幣まで、悉く素肌に卷着けてあつたので、一行の書置も無かつたが、

顚末は卽座に判つた。えらい物である。

豐後は舞の本の、百合若大臣の故郷と云ふことに爲つて居る。浦の男女は今既に其歌を忘れてしまつたが、曲に現れた昔の愁と惱みとは相續して居る。玄界の離れ小島では、百合若はひたすらに故郷の家を戀焦れた。ロビンソンクルソーの物語と比べると、先づ基調に於て全く異つて居るのである。綠丸はロビンソンの犬猫とは違つて、空中自在の靈鷹であつたけれども、主人の旨を承けて豐後の府中へ往來し、其妻子に安否を知らせるのを殆ど唯一つの目的として居つた。百合若單衣の白い袖を斷ち切り、紙筆と血で書いて此鳥に持たせて遣ると、世間知らずの奧方は、大きな硯までも入用かと思つて、之を翼に結附けて還した。綠丸は硯の重さに堪へず、終に玄界の渚に來て死んだとある。坪內先生の說では百合若は卽ちユリシスの作り換へと云ふことであるが、鷹の忠義

の因緣を嗟歎したのは、恐らくは日本の方ばかりであつて、而も征戰事繁き時代の、所謂春閨夢裡の人々に、新しい哀れを泣かしめたのは、正しく艶に優しいこの島住居の一節であつたらうと思ふ。さうすれば此が又、我邦傳來の海の文學であり、且は海の民の深いなげきの聲でもあつたのだ。

雲海遠く隔たつた宮古の水納島にも、ほゞ同じやうな大和人の漂流談が有つて、此は百合若とは謂つて居らぬ。硯を負うて流れ着いた鷹の墓は、後世一つの靈場と爲つて居た。秋毎に此墓の上には、多くの鷹が海を渡つて來て休むので、永く新なる感動を人に與へたと謂ふことである。綠丸の翼を休めたと云ふ松は諸國に在る。出羽にも奧州にも此鳥の爲に築いた塚がある。百合若が後に廻國して供養をしたなどゝ謂ふは作り事で、多分は遠き昔勇ましい鷹の姿を見て、何れの旅人の家でも之を生靈の音信を傳へるものと、考へた名殘であらう。

絶海の孤島に獨り住む者、或はさうでもして生きて居るかと思ふ者の身内が、稍肌寒い秋なかばに、遙々と渡つて來る鷹の聲を聽いて、忘れ難い有りし日の面影を深めるのは自然である。それと言ふのが無始の昔から、故郷は土であり、子孫は唯一の神主であることを、絶えず信じて居た我々の遺傳が、無意識に海の自由を制限してしまつた、悲しい鎖國の結果であるかも知れぬ。

四　ひじりの家

日向路の五日はいつも良い月夜であつた。最初の晩は土々呂（とゝろ）の海濱の松の陰を、白い細かな砂をきしりつゝ、延岡（のべをか）へと車を走らせた。次の朝早天に出て見たら、薄雪ほどな霜が降つて居た。車の犬が叢を踏むと、其が煙のやうに散るのである。山の紅葉は若い櫨（はじ）の木ばかりだが、新年も近いのにまだ鮮かに殘つて居る。處々の橋の袂、又は藪の片端などに榎であらうか、今散りますとでも云ふやうに、忽然として青い葉をこぼし始め、見て居るうちに散つてしまふ木がある。土持殿の御支配の頃から、否々皇祖御東征よりも更に以前から、海に近い縣（あがた）の里の野原では、寒い霜夜の月の明方毎に、斯うして物の綠が土に歸して居たのであらうが、或時或旅人が通り過ぎて、之を美しいと見るのは瞬間であるなどゝ、自分は有りふれた斯んな事を考へ出した。それも自分が今尋ねて行く人の境涯が、餘り我々の生活と變つて居る事を、想像しながら來たからであつた。

南方の龍仙寺さんと謂つて尋ねて廻つたが、不思議と誰も知つた人には逢はぬ。そんな筈は無いのだ。内藤家の御祈願所の、隨分名の有る法印さんだと聞いて居る。夫ならば野田の稲荷山の行者殿に違ひ無い。もう此邊には他に無いからと謂ふので、旭がさして來た松山の霜解を、こつ〳〵と登つて見た。縞の着物に角帶の、髪は一寸も延ばした老人が、果して訪ねる谷山さんであつた。日向に移住して來て既に十七代に爲る。本國は大和で谷山覺右衞門と云ふ人、土持家の盛りの頃に兵法の師範として、子息の重右衞門を連れて下つて來た。所領は山の麓の大貫（おほぬき）村で、野田山に砦を構へ、稲荷は卽ち其城内の鎭守であつた。世中が改まつて内藤氏の藩が出來た時、只の臣下で居る代りに山伏に爲つてしまつたが、それでも火事に遭つて山上に移つた父の代迄は、大貫の元の屋敷に引續いて居たさうである。稲荷大明神の右手には廣い平地が有つて、其中

央に井戸がある。之を前に取つて今の住居が、背戸を谷間に臨ませて、幽かながらも城地の俤を遺して居る。明治五年に修驗の職は廢せられたが、關東諸郡の山伏のやうに、神主や只の農家に爲らうとはせずに、作州津山の在から潰れ寺の名跡を買ひ、表向き之を引移したのが龍仙寺で、土地の人もまだ其名を知らぬ位である。以前の名は明實院、それを法印は御自分の名にして御座る。

鎭守の稲荷樣は御寺だけに、咤枳尼天（だぎにてん）として祀つてある。詣る人が今風だから、華曼や提灯の眞赤なのも仕方が無い、自分は歸り途にその數多い鳥居の下を通りながら、是とは緣も無い遠い津輕の海岸の荒濱を思ひ浮べた。今年初秋の風の早大に冷かな朝であつた。一つ事ばかり考へながら、獨あの濱手の淋しい路を歩いた。曾て深浦沿革史を世に公にした海浦（うみうら）さんと云ふ人は、名が義觀だから或は僧侶だらうとは思つたが、あんな阿倍比羅夫（あべのひらふ）の直系見たやうな、昔

の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。自分迄でもう五十一代、肉身の相續で此十一面觀世音に御仕へ申すと謂つて居られた。宗教の事相は淵底を究めた篤信の聖(ひじり)である。日本の國風に此ほどよく適合した永い歴史の一宗派を、何で又取潰して只の眞言寺に編入してしまつたかと、六尺もある大きな體を前にのし掛かつて、まるで私がさうしたかの如く、眞正面から見詰められる。わしの寺は聖德太子樣の時から、俗生活の儘で成佛する敎に基いて、肉食もすれば妻子も育んで來たものだ。世中が變つたからもう宜しいと、大目に見て置かれる寺とは話が違ふ。世間が八釜しく無いだけで、只の寺に女房を置くのはあれは非如法ぢや、破戒ぢや。わしの方は敎理ぢや。手を組んで竝んで行かれるわけが無いとも言はれた。貴僧を見ると昔を見るやうな氣がします。定めて戰國の頃などは、此地方の勇士の家々と緣組なされ、薙刀などで大いに働いた人たちが、此御寺からも何代か出られたことであらうと謂つて見ても、にこりともせずに、此宗派の獨立せねばならぬことを說く人であつた。一度逢つたら忘れ能はざる上人である。

日向の延岡の近くに谷山師の居らるゝことは。この深浦のひじりから開いたのである。修驗派獨立の初期の運動に、東京は神田の電車の交叉點の近くで、全國の行人(ぎやうにん)たちが大集會を催した事があつた。其所に兜巾鈴懸の昔のまゝの姿で、期成同盟に馳せ加はつたのは、龍仙寺の法印一人であつたさうだ。自分の寺は舊藩公の時代から、此行裝(いでたち)で寺祿を食み祈禱を仰せ付かつて來た。世間を憚かるべき道理は無いと、立派に言切つて居られたと謂ふが、自分が話をして見た感じでは、海浦さんと同樣小兒よりも無邪氣で、些しも山伏流の高慢な樣子などは無かつた。

其とは反對に寧ろ寂寞たる陰影が有つた。津輕の御寺でも二三年前に、自分等より大分若い篤學なる嫡子を亡なつた。次男は繪などを描く人である。さうして同志と爲る弟子達が少ない。自分は日向へ來てこの氣の毒な話をすると、頻に谷山さんの顏の色が曇つた。實は私の方でも、相續させる積りの倅が死にました。其次は實業の方に居る爲に呼戻しもならず、十五に爲る孫を是から仕立てることになつたとある。其少年は今戸口に立つて、いつ迄も歸る自分の後影を見て居るのがさうらしい。自分は旅人だから、勿論ずん〳〵と往つてしまふ。而もこの閑かな山の寺の人々とても、やはり亦世中の道をあるいて居て、一つ處に永く彳んでは居られぬのである。

五　水煙る川のほとり

飫肥（おび）の町へは十二年ぶりに入つて來た。町にはまだ貂（てん）狐猿羚羊（かもしか）などの皮をぶら下げて賣つて居る。やがて海に入る靜かな川の音、板橋を渡る在所の馬の轟きまで、以前も聽いたやうな氣がしてなつかしい。城迹の木立の松杉は、伐つて又栽ゑた附近の山よりは大に古く、曾て穴生役（あなふやく）の技藝を盡したかと思ふ石垣の石の色には、歷史の書よりも更に透徹した、懷古の味ひを漂はせて居るが、今の小學校の巨大な建物に、引懸つて居るものは振德堂の額だけで、百數十年の學徒の勞作や蒐集などは、もう偶然の訪問者等には、ちよつと觀られぬやうな處に藏してあるらしい。さう何時までも昔に滯つては居られぬと感ずる時代は、どこの城下の町にも一度づゝは必ず遺つて來る。或は此邊へは今恰も來て

居るのかも知れぬ。九州は全體に人の智惠の、能く利用せらるゝ地方なるにも拘らず、政治の中心の地から稍遠過ぎると云ふ不安が、無用に生活の常の道を攪亂する傾きがある。況や海と高山とで遮斷せられた南の果の町が、今は却て昔の要害を悔み、しもせぬ世間の聲に聞耳を立てゝ、見馴れた眼前の物の意味を、假に暫く忘れて居たにしても不思議は無い。

のみならず或時代には、あんまり山から此方ばかりを、我天地として居た爲に、本意でも無い度々の戰をせねばならなかつた。外部を知ることの多少に從つて、同じ程の智者が成功もすれば蹉跌もした。而も兎に角名の遺つたのは、此等少數の弘い世中と交渉の有つた人ばかりで、與へられたる平和を出來る限り樂み、安閑の生涯を送つて居た多數の高士は、永遠に歷史の表面から消え去つた。要するに斯う云ふ先例の集積したものが、卽ち町それ自身であつたので

ある。都會は一般に現代を小賣する場所だ。從つて飫肥ばかりが古い感情の姨捨山で無かつたら、其は寧ろ不自然な現象と謂はねばならぬ。

自分は旅の無聊を奈何ともする能はずして、町の端まであるいて何か見る物を搜した。伊東家は他の諸國の中大名の多數に比べて、更に一段と嚴肅なる墓域を、其舊領の地に構へる權利が有る。昔工藤犬房丸（いぬぼうまる）の子孫が遠く下つて、此邊に盤崛しなかつたら、乃ち酒谷（さかたに）盆地の歷史は無いのである。人は省みないがそこいらの松よりも岩よりも、猶古い記念が溢れるほどもあるので、而も其記念は此川の昨日の水の如く、既に流れて大海の潮にまじつて居る。それに比べると僅に松風の一つの岡を隔てゝ、今も現代の人々が來て歎く一團の墓の方は、さゝやかな清水のやうなものであつた。日本を大きくしたと云ふ近世二度の戰役に、此ほど死んだかと驚く程、此土地からも多くの若者が、出て戰つて死ん

で居る。其隣の一區劃には、此人たちの叔父の列の數十人が、やはり同じ位の若さで、當時賊と呼ばれた側で戰つて、而して亦討死をして居るのである。三十二で腹を切つた惜い新人物、小倉處平の墓を中にして左右に、何れも健氣な名前ばかりだが、世を憚つて齡と斃れた場處の他は刻んで無い。其中にたつた一つ、二十八歳の平部俊彥だけは、祖父の嶠南先生が其碑文を書いて居る。十四で孤兒と爲つてから、先生が側に置いて親ら之を敎育した。夙く經學の要義を解し、文章も少年の作のやうでは無かつたので、東京に居た頃は安井先生も見込が有ると申された。鄕里に還つて小學の敎員をして居る中に、今度の事件が起ると何の躊躇も無く、直に出て往つて小隊長に爲つた。さうして立派な死に方をしたと書いてある。當時の遺族の立場は定めし辛かつたであらうのに、半句も疏明の辭が無いのは分かつた人である。先生は此時六十三、四つに爲る曾孫が母と共に殘された。久からずして其兒も亦歿したと書いてある。

若い人々の花やかな討死よりも、今に爲つて見ると老學者の生存の方が痛はしい。嶠南翁は明治五年に東京を引上げる前、鄕里の家の六鄰莊の記を書いて居られる。頤を支へ窓に凭つて山川を四顧し、遠く荒營古壘の迹を眺めては戰國將士の勞苦を思ひ、城市萬戸の煙を望むときは昭代太平の惠を感ずる。夜は高根の月、川の瀨の音、之に對しては酒無くして憂を忘れ、藥せずして長生を求めつべし。後世子孫幸に之を荒すなかれと謂つて居るが、子孫は先づ絕え、もう其屋敷の地には何人が來て住むやら、尋ねて見ても一寸は知れさうに無かつた。翁の遺著には永く世に傳ふべきものが勿論ある。併し之に由つて曾て一たび此學者の切實であつた生活を、果して繫ぎ留めることが出來ようか。我々が求める平和の基礎には、やはり澤山の忘却が、必要なのではあるまいかとも

思つて見た。

山が近いからか又は此頃の季節の爲か。今朝も大いに立つて居た水煙が、晩方にも酒谷川の流を蔽うて居る。宿の欄干に出て立つと、河原には薄々と月がさして、もう物を洗ふ人の影は無い。前に來て泊つた家も板橋の近くであつたが、二階は無くて門の脇にたしか柳が一本有つた。名を忘れたばかりに誰に聞いてももう分らなくなつた。あの時夜更まで來て話した郡長の田内氏を始め、僅か十二年の間に死ぬ人は死に、去る人は遠く去つてしまつた。さうして自分も亦偶然に、今一度過ぎて往くのみである。未來にも仕事がある。强ひてはつきりと此樣な昔を、思ひ出さうとするには及ばぬのかも知れぬ。

六　地の島

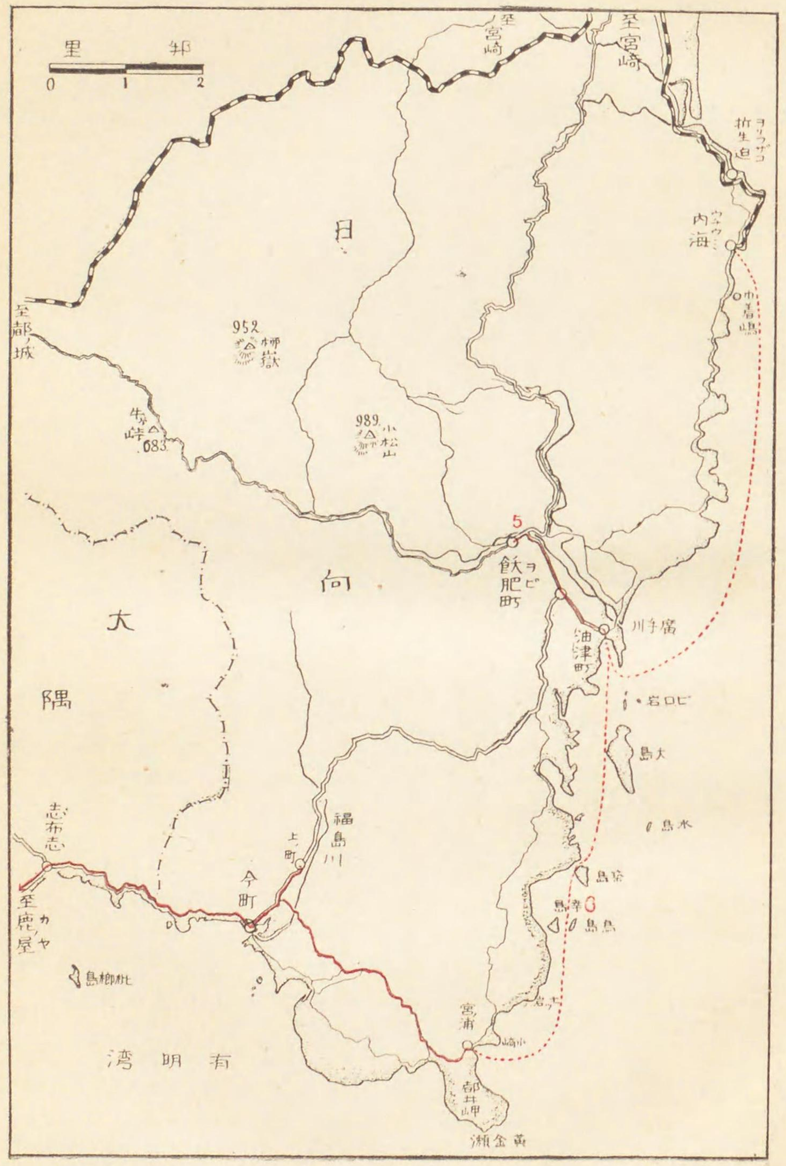
九州の東海岸には、忘れられた地の島が幾つも有る。沖の小島の遠く萬人に眺められ、夕日夕月に照され、歌に詠まれ、或時は漕寄せて蔭を求める船あり、清水が有れば來て汲み神を祀り、後には人も住み、風待ちの湊とも爲つて盛衰するのに比べると、此方は目に立たぬ淋しい境涯であつた、いつでも海邊の山の裁ち屑の如く取扱はれて居る。關東で言ふなら相州の江島、安房の仁右衞門島、又は常州磯原の天妃山の如き例外は、日向方面に於ては青島がたゞ一つ、是は幸ひにして滿山の蒲葵林が、ちよつと熱帶らしい感じを與へる爲に、見物も來れば繪葉書も出て居り、何時の間にか彥火々出見尊の御召舟の、無目籠が化して成つたと云ふ、傳說さへも行はれて居る。

其よりも永くなつかしいのは、豐後では臼杵灣頭の津久見島である。山が險しい爲か此島ばかり、保安林に編入せられる以前も一向に斧斤を知らず、隙間も無く茂つた綠の樹の中から、色々の鳥の聲が遠く波の上の舟まで聞える。今は目白の名所だと謂ふが、ツグミと呼ぶのもやはり鳥の名から始まつたやうに思ふ。農家が只一戸對岸から渡つて小屋を構へ僅かの薯畠を作つて居る。シャアの村からも、稀に枯枝を拾ひに來る位で、人の歷史には緣の薄い島らしい。

夫から出て來ると、左手の海上に沖の無垢島と地の無垢島が見え、次第に前に話をした保土の島に近づくのである。保土の山に登ると佐伯灣を隔てゝ、南に鶴見崎に接して大島と云ふのが指點せられる。保土から移住したと云ふ舊家なども有るさうだ。此入海では大入島が最も大きく、幾つかの網代と美しい清水がある。娘たちが帆を操つて毎日町に往來して居る村である。又人は住まず

して耕地ばかりの島も有る。中浦の沿岸を東へ進んで、大島の瀨戸を通り拔けると、鶴見の鼻から芹崎までの間に、多くの小さな無人島が連つて居る。地の黑島と沖の黑島との中を船は行くが、沖黑島の方には蒲葵が生えて居る。蒲江の港の口には島が又二つあつて、その遠い方の深島には、人も住み學校も有り、蒲葵の林も有ると云ふ話であつたが、もう夕方に爲つて其風情を見ることは出來なかつた。

日向路では東臼杵の富高の邊に、二つ三つの地の島が車の上からも見える。今や既に單純な草山である。其東の沖にも一の枇榔島があるのだが、懸離れて居て樣子が分らぬ。是から南はずつと靑島の邊まで、川毎に砂を押出して長濱を作り、以前は地の島であつたらしいものが、多く地續きの岡に爲つて居る。內海の南の巾着島なども、島は名ばかりで今は一個の岬である。九州一の良い港



を、あたら僅かの新田の爲に淺くしてしまつたと謂ふ外浦の堤も、やはり大きな地の島を引寄せて繫いだもので、之を爲し遂げたのは人よりも二つの川の泥であつた。出雲風土記などでは國神の偉功に算へたほどの地變でも、時代が後であつたばかりに飫肥の海口では、咲き榮えた靜かな文明を一朝に滅したのである。油津の繁華は恐らくは是から移つたものだらうが、依然たる昔の小場島大島は、此が爲に能く外洋の波濤を防ぎ、又參差たる入江の風光を衞つて居る。嘉永の頃迄は此大島には人家は無かつた。藩の牧場として久しく良馬を產して居たと謂ふのは、多分駿馬を龍の種とする思想の繼續であらう。目井の津まで二十餘町、一の船着きも無かつに荒濱から、若駒を牽き出して往つた勇ましい光景が想像せられる。小場島は卽ち亦蒲葵の島のことで、曾ては此島にも繁茂したものと思ふ。更に南に進んで市木村の築島にも、處々に同じ木の林がある。

船から見える三四戸の農家が、塗壁瓦葺きの中國邊と同じやうな構で、蒲葵の白い葉の葉隱れに、立つて居るのは面白い。上つて遊んで行きたいやうな氣持がした。

築島の陰を離れると、次に鳥島と幸島とが現れる。幸島は少し大きくて周りが二十何町、一段と陸地に近い。松の密生した背面を、船は通つて行くのである。猿が多く居るので知られて居る。猿の中に只一軒、番人見たやうに住んで居る人が、手船を漕いで時折陸の方へ往來する外に、あまり來て見る者は無いさうである。猿も淋しいと云ふわけか、遊びに出かけることがある。一匹ぐらゐは見えさうなものと、船窓に凭つていつ迄も眺めたが、こんな風の寒い日には出ますまい、夏ならば毎日のやうにあの邊の岩に降りて、蜷を採つて食べて居ますがとある。いつ迄斯んな小さな島に、平安で有り得るかと思ふと、猿ば

かりの問題では無いやうな氣がして來た。

それから自分は都井(とゐ)の宮浦に上陸して、牧の野馬を見に岬の鼻まで往つた。高鍋藩の經營した、此も至つて古い海の牧場で、所謂福島馬の故郷である。今や馬種の改良が盛に行はれて居る。御崎社内の野生蘇鐵と共に、「此山の猪捕るべからず」の制札を以て、天然記念物の野猪は保存せられて居るが、人作の福島馬のみはえらい虐待で、牡は悉く二歳に爲る前に、牧から追はれて試情馬などの淺ましい生活を送つて居り、之に代つて異國の種馬が、來つて極端の幸福を味はつて居る。

此から峠を又一つ越えると、福島の町が見える。卽ち中世の櫛間院(くしまのゐん)の地であつて、クシは卽ち岬の古語である。入海を隔てゝ志布志(しぶし)の蒲葵島が美しく、其向ふには大隅の山が見える。大隅のスミはやはり亦、シマのことだらうと考へ

られた。

七　佐多へ行く路

島泊(しまどまり)の漁村は僅かの磯山川の川尻に固まつて居る。爰にも小さな地の島が一つ、殆ど砂濱に續かんとする地位で、南海の風を遮つて立つて居る。昨夜夜半の大雨には、沿岸のボケ網舟は悉くぬれて戻つて來たが、此浦でも家の數より多いかと思ふ刺子(さしこ)の仕事着が、磯の大岩小岩にずらりと掛けて乾してある。さうして男たちはまだ寢て居るらしい。今日は大晦日だが、新で正月をする人は

此村には居ない。

伊座敷の町からこの島泊まで、元は一番高い山の八分迄登つて越えるのが、近い故に唯一の通路であつた。然るに隣の西方區を通つて、最近に一間幅の路を一建立で開いた人がある。それが豐後から來た炭燒だと聞いたときは、何だか古い物語のやうで嬉しかつた。炭燒は十何年の勤儉で拵へた家屋敷を賣拂ひまだ入費が足らぬのでわざ〳〵國へ金を取りに行つて來た。さうして出來上つた新道の片端に、小五郎の小屋の如きものを建てゝ住んで居る。どうして斯んな志を立てたか、又末には如何なる果報が來るものやら、自分などには分らずに終りさうである。

九州も爰まで來ると、眞に國の端と云ふ感じが強い。淺い山を拓けるだけは薯畠にした爲に、降るほどの雨が悉く谷川に出てしまひ、溢れて通路の草を漂はし、やがて皆海に呑まれて行く。徒渉りがすむと直に坂を登り、越えてしまふと又小川だ。坂も多いが曲り角も多い。三町と同じ方を向いて進むことが無い。樹の間からは大抵海が見え、淸々とした聲で頰白などは、沖を見ながら囀つて居る。風がいつでも少しづゝ吹いて居る。

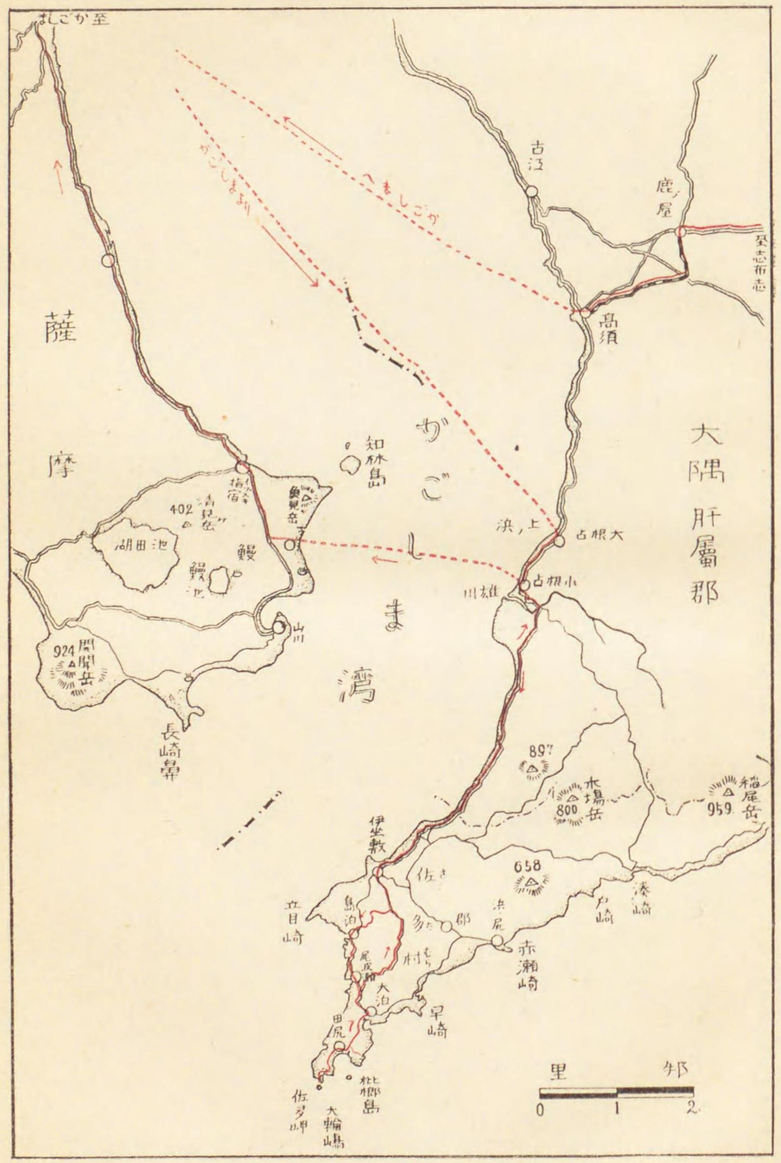
尾波瀨で一旦又海の渚に下り、村の後の放牧地を通つて、草山を十町ばかりも行くと、今度は外海の濱に出で、中央の山路と一つに成る。大泊と謂つて種子島へ渡つた船着きである。もう汽船の世中に爲つて、只の漁村に復つて了つたが、夫でも松飾りをして春を迎へんとする帆船が二隻、入つて來て繫つて居る。歸りに見ると紅い國旗を立てゝ居た。小學校でも頻に式場を用意して居る。岬の端まではまだ一里半もある。燈臺の人たちに子供が有つたら、爰迄通つて來ねばならぬのだ。中間に田尻の部落はあるが、分敎場も此には置いて無い。

田尻は廣々とした石の多い濱である。其名の如く峠道の右左に、若干の水田を持つて村人は登つて耕して居る。村の周圍には蘇鐵が多い。此が自然に繁殖して居るのを見ると、御崎神社を信仰した樺山權左衞門が、琉球からの凱旋に携へ還つて奉納したのが始めとは、先づ信じにくい傳說である。村から社まではまだ二十町もある。此が一團の綠の御崎山で、社に詣る一筋の徑を除くの外今なほ完全に小鳥の世界である。田尻の土持氏に今夜の宿を賴んで置いて、自分は獨り午後の日影の洩れる樹下の路を歩んだ。暇有つて樹實の正に熟する季節に、折好くも此山に來て見たことを喜んだ。花よりも麗しい黃紫色々の大小の珠玉が、枝毎に豐かに綴られて居る。之を啄みつゝ歌ふ者の聲である。諧々として自然の饗宴の樂みを、はてしも無く語つて居る。

同じ燈臺でも陸奥の尻矢（しりや）の荒磯崎などでは、闇夜に迷うて來て突當つて落ち

る鳥が多しと謂ふが、佐多に此事が稀なのは、是亦御崎の神の林の導く故であらう。秋から先は四方の渡鳥が、悉く爰に來て休むかと思ふ程、樣々の鳥が遊んで居る。靜かな日には二十五海里の海峽の迅潮を越えて、種子屋久（たねやく）の磯の鳥までが、岬の岩の上に來て漁つて居る。空から行く者には此山ほど、好い目標は無いのだらうと、永年鳥を友とする人たちは語つて居た。人に取つては船が大きくなるにつれて、港から港の間が愈ゝ遠くなるが、實際此岬まで來ると、南の島の一列の飛石であつたことがよく分る。黑島でも竹島でも硫黃島でも、佐多の岬の端に立つて見ると、顧みて薩州の山を望むよりは猶親しい。島々に行けば次の島が又さうであらう。沖へ出て見たら尙一層、移る心が自然に起ることであらう。

御崎の山には蘇鐵と蒲葵とが多く、何れも亦實が熟して居る。親木の陰から



ずつと離れた場所にまで繁殖して行くのは、やはり稍大きな鳥が運ぶのだらうと、土地の人も謂つて居る。蒲葵も此邊まで來ると次第に民家の樹と爲り、殊に社や堂の近くに大木があるのは、是は古く此實を播いたものかと思ふ。併し笠や箒にする葉は、燈臺に近い小島から採つて居る。コバ笠コバ箒などゝ謂ふコバは、沖繩及び先島の、クバと同じ語である。

田尻の除夜は浪の音ばかりであつた。戸を立てぬ縁側から月がさして、障子の紙がふるへる程の微風が吹く。時計を見ると今將に歳が替らうとして居た。初日出には眞面に向つた濱である。おゆみと謂ふ村の女に荷物を持つてもらつて出て來ると、袴をはいた學校の兒が、早砂の上に小さい足跡をつけて新年の式を歌ひに先へ行く。大泊を過ぎて山の路にかゝると、再び佐多の御崎が深綠に遠く見える。幾らでも曲つて幾らでも登るかと思ふやうな路であつた。處々

に牛馬の爲に稍緩傾斜のつゞら折が新たに開いてはあるが、使はぬと見えて草が生え、人は昔からの急な坂を通るのである。頂上を大泊のヨクと呼んで居る。ヨクは「いこひ」といふ意味で、誰でも爰へ來れば休む。三方の海が見える。島島も見える。さあ行かうと立上ると、おゆみが荷の上に結はへ附けて、町へ持つて出るコバの葉の束が、がさ〳〵と南國の音を立てた。

八　いれずみの南北

七島南端の寶島と、大島の笠利岬（かさりみさき）との間の、潮の流れの最も迅い四十何海里

は、土俗の上から觀てもやはり一つの境である。例へば中國四國の海岸で、カネリ或はイタヾキなどゝ名づけて、女が物を頭に載せてあるく風習は、九州南部にも弘く行はれ、殊に小さな島では水迄もさうして運ぶが、爰に來るとそれがまるで無くなつてしまふ。奄美列島では一番離れた與論島まで、それから沖繩の本島でも北部の三四箇村は、何れも幅二寸ばかりの苧の組紐を額に引掛けて、其を力に物を背負うてあるく。ちやうど内地の村の人たちが、胸の上部に引掛けて負ふやうに、石や薪の重い荷物でも、皆斯うして額に吊つて持つて出る。山坂があんまり險しい爲に、頭に載せてはあるかれぬからと、首里や那覇などの、イタヾキを常の習とする地方では説明して居るが、一方には又陸前牡鹿の江の島の如き、爰に限つて肩には負はず、頭に載せて居る島に於ても、やはり同じやうな理由を人が付けるから當にならぬ。山は少ないが沖繩から南に

も、急な苦しい坂は隨分有る。處が此方面では一般に、必ず頭の上に載くことに爲つて居るのである。額に掛ける風はアイヌの中にも行はれて居るが、夫は偶合とも見ることが出來る。兩手を自由にして置いて物を運ばうとすれば、頭か額か兩脇が、先づ此以外には工夫が無いのである。隣の人を見て眞似たのも亦不思議で無いが、其よりも不思議なのは眞似に境のあることである。

他所の風習はさう容易に模倣せられるもので無い。白野夏雲翁が今から四十年ほど前に、寶惡石の島々を巡視した時には、手に入墨をした女を何人か見た。何れも大島から落付いて來た婦人だと、七島問答の中には書いある。此海峽を越えて、嫁に來るだけの親しみは有つても、入墨の習ひは七島には入らなかつたのである。七島では手の甲の入墨の代りに、女が皆齒を染める。但し此方の昔風とは又ちがつて、十三の歳の五月に只一度だけ、鐵漿を附けるのである。

若い女が女に爲つた印に斯うすると、後には鐵漿其ものが美しく感ぜられ、裝飾に爲り又道理が附添へられる。此點は南の方の島々の、入墨もよく似て居る。

廿何年以前に沖繩を旅した人の話に、十二三の小學の生徒が、豆粒程の入墨を刺したのが、愛らしく見えたと謂つて居る。此頃から始めて段々大きくして行く習であつたと思はれる。處がちやうど其時分に、入墨を禁止する布令が出た。隱しては遣れぬ仕事なので、此禁制はよく行はれた。曾て美しかつた白い手が、もう追々皺になる年輩の女だけに、入墨が殘つて居る。もう賴んでも眞似をせぬ時代が來た。而も昔はまだ老女の間に、はつきりと遺つて居る。

沖繩縣では一般にハチジと謂ふやうである。慶長の初に出來た琉球神道記にも、入墨の風俗を述べて針突（はりつき）と書いて居るから、ハッツキの轉音であることよく分る。大島では釘突と謂ふと、南島雜話にあるのはこれも針突の誤寫では

無からうか。何にしても二島分立の以前から、弘く行はれて居た風習であつて其が時を經るうちに僅かづゝの變化を見た。大島の方ではもう珍らしいと云ふ程に、針突をした人が少なく爲つて居る。村に入つて之を搜して行くうちに、折は々絲滿（いとまん）からの移住者を見出した。絲滿の女たちは何處に來ても、頭に物を載せて往來する上に、依然として南沖繩のハチジをして居る。四瓣を區切つた菱形の花を、手首か甲の眞中に大きく彫り、指の根毎に幅一杯の星形を附けて居る。之に比べると大島の入墨は、人に依つて大小が有り、模樣なども思ひ思ひに、趣向をして居るかと思はれた。詳しく尋ねたら村として又は家として、何か變化を付けるわけが有るのかも知れぬ。只尋ねて答へてくれさうな人が、今は既に無いのである。

沖繩でも元は入墨に依つて、女の故鄕が大凡知れた位、少しづゝの相違が有

つた。島々には必ず其が著るしかつたことゝ思ふ。而も八重山の女たちの今のハチジには、沖繩とよく似た菱形や星が多いやうに見えた。其中でも與那國人の二三の例は、却つて遠く隔つた宮古の方に近く、宮古の入墨の沖繩と變つて居ることは誰が見ても分つた。宮古の婦人は手首から、三四寸奥まで刺して居る。織つた上布の絣のがらを、一つ〳〵彫入れて記念にすると謂ふのは、多分簡單な小さな模樣を、多く竝べて居るからの誤傳であらう。

此樣に複雜な變化の中に、只一つ指の背を通した箭の形だけは、何れの島でも大方同じである。南の方では其箭に羽があり、沖繩より北に行けば、矢筈ばかりが著しく爲つて居る。恐らくは女性の物を指さす力が、宗教的に强かつた大昔の世の名殘であらう。其が何方を指さしたかは、今は既に絶對に不明と爲り、人は只有る限りの島々に、散漫として移つたやうに考へて居る。是が果して島人の眞の歴史であらうか。千古の英傑に碑あり傳記ある如く、曾て鈴のやうな笠を深く被り、乃至は高い窓の外に立つて、援助の手のみを差出したと云ふ神女の事蹟は、獨り此の將に消んとする針突の文字無き記錄が、我々を喚び留めて之を語らうとして居るのである。

九　三太郎坂

名瀨の港は大島の西北の海に向つて開いて居る。砂濱を意味する名瀨の兼久から、東海岸に越えて南へ行く路は、大抵自働車の通る程に改修せられ、さう

して少しく損じて居る。併し常には曲り角毎に人に逢ふ位の人通りが、今日は只舊正月の元日である爲に、斯の如く靜かに日が照つて淋しいのである。たまに向ふから人が來ると、必ず頰被りをして六尾七尾の鯛を擔つて居る。小湊附近は鯛の魚のよく捕れる處だ。除夜に大漁があつたから、今朝持つて出ると云ふばかりで、別に進物では無いさうだが、それでも何だか正月らしい。里近くの谷に紅い山櫻が咲いて居る。絲芭蕉の畑が盡きると、まばらな蘇鐵の林が有る。蘇鐵とヘゴとは却て國頭の山よりも多い。白い花の苺が咲いて居る。苺を此邊ではイチュビと呼んで居る。

和瀨（わせ）の新峠には、もう茶店が二軒建つて居る。手前の方の店先では黑の木綿の紋付羽織の男が、褒められて嬉しさうな顏をして、ママアンマ節と云ふのを彈いて居る。例の蟒蛇の皮を張つた小さな三味線である。海のよく見える今一

軒では酒を飲んで居た。地酒又はモロハクと名づけて、味淋を薄めたやうな甘いので、薩摩で出來ると云ふことだ。盃にゆづる葉を二枚敷いて白い盃を載せて自分にも勸めた。肴は例のテイノイヨ（鯛の魚）であつた。下（お）りて又登るべき岡が海に近く見える。亭主夫婦の話は新道の事ばかりだ。なる程此邊の景色は別莊を建てゝ見るにはよい。車が多く通るやうになれば、爰へ來て休まぬ旅人はあるまい。それだから今に〳〵と謂つて居るのである。爰を出て來ると伐り殘されの松の樹に鳥が好く囀り、外も誠に長閑な正月であつた。

併しこんな日にも捜して見ると、淋しい人は何處にか居る。東仲間（ひがしなかま）村の橋の袂から、右手へ上つて行く一筋路は、是も明治になつてからの新路だ。取付の五六町が急な坂であるばかりで、奥には一本も伐らぬかと思ふ椎樹の山が、深い綠の塊を爲して並んで居る處を、谷川の向ひに眺めながら、緩々と行く長根

である。如何にもよく考へて付けた路線だ。三十年餘り前に內地人の夫婦が、此峠に茶屋を建てゝ附近の林を開墾し始めた。肥後から薩摩に越える三太郎峠とは違つて、是は其爺の名に基いて、三太郎坂と呼ぶやうに爲つたのである。それほど世に聞えた三太郎ではあつたが、彼にも相談せずに世の中は變つた。事業の方は氣が長く、老ばかりは完成した。西仲間から昇る坂があまり眞直で左右に餘地が無い爲に、もう第二の新道は此峠を通らず、をめいても屆かぬやうな遠方の山をうねつて居る。畠を作る爲ばかりなら、何も斯んな高い所へは登らなかつたであらうに、三太郎は終に茶店を罷めてしまつたさうである。夫から今は如何して居るだらうかと、峠に上つて來て其一つ家に立留つて見ると、二方から踏込む店はすつかりしめ切り、出入の戸を只一尺ほど開けて、土間へ日が差して居る。正月だと謂ふのに婆さんは風でも引いたか、蒲團を被つた白

髮の頭が見える。圍爐裏の此方には肱を枕にして、三太郎坂の三太郎はごろりと寢て居る。

大島が今の大島になる迄には、夫はえらい苦鬪が有つた。僅か四五十年の昔を振返つて見ても、今の三分の一の幸福も此島には無かつたのが、既にどしどしと名士を島外に出すほどの活躍をして居る。島人全體としては、切拔けて出て來たのだから明かに捷利だが、よく聽くと其勝鬪のどよみの中にも、幽かな呻吟の聲がまじつて居た。例へば今通つて來た朝戸(あさと)の村なども、紅い櫻が咲いて平和らしい家並であつたが、文化年間の記錄を見ると、佐念(さねん)と朝戸の兩村は今人家無之とある。男女借財の爲に悉く身賣して他村に行き、跡は作地のみ也ともあるから、乃ち其以後の植民である。これと同樣の潰れ村が、他にも尙十何箇村有つて、其儘故迹と成つてしまつたのもある。此は享和の頃の凶作の結

果であつたが、其前後にも不幸は屢〻繰返された。

名瀬の近くの作大能（さくおほのう）とか云ふ處でも、或時の飢謹に男女山に入り、苺や阿檀（あだん）の實を採つて食盡し、野山にはもう何も食ふ物が無くなつて、數十人の者が阿檀の木に首を縊つて死んだ。夫から以後は毎年其月頃になると、亡靈が出て來て何とも謂はれぬいやな聲で、唄を歌つたと謂つて、其唄が幾つも傳はつて居るのである。

いちゆび山のぼて、
いちゆび持ちくれちよ。
あだん山登て、
あだん持ちくれちよ。

是は恐らくは例の魂祭の踊に、深い同情から發した悲壯な歌を唱へたのを、亡

者の聲なりと誤つて傳へたものと解するが、死んだ迄は事實であらう。最初から生れて來ぬ方がよかつたと思ふ者の魂魄の爲に、永く後々の弔ひをするのはをかしいが、此世で救ふだけの力の無い人々は、どこの國でも斯んな話を語り傳へて、只いつ迄も歎息をして居るのである。

一〇　今何時ですか

實に奇妙な子供の遊が流行して居る。見馴れぬ洋服の人などが通ると、時計を出させて見て、跡でみんなで笑ふ遊である。金か銀か大きいか小さいかを、

今何時ですか

前に言當てたものが勝になるらしい。自分はもう何遍か諸處で之に出逢つて居る。此大島でも宅の末の兒ぐらゐのよち〳〵と歩く子が、今何時でちかなど〻謂つで附いて來た。たしか木村莊八君の紀行にも、大連で支那人の子供が、土塀の上から顔を出してさう叫んだと書いてあつた。彼等小兒は村から外へは滅多に出ぬ。さりとて誰が來てこんなくだらぬ事を敎へやうか。自分は何よりも先づ世の所謂流行には、まだ不明の現因が潛んで居ると云ふことを感じた。

土地の人にもさう謂つて來たことだが、大島の子供には全體におつとりとした處が少い。一つには普通敎育と云ふ特殊の事情の爲かも知れぬが、通例人に聞えるやうに仲間同士で喋る代りに、臆面無く旅人に話しかける者が多かつた。或山の蔭では四五人の子が目白を捕つて還るのをぢつと見ると、すぐに買ひませんかと謂つた。町へ持つて行くと一圓になりますよと次の子が謂つた。又或

板橋の上で遊んで居る夕方の群に、戯れに此狗の子は誰のだと聞くと、其はワームン(吾物)だ、貰つてくれるなら縛つてあげましようと謂つたのが、ほんの十一二の生徒であつた。

其よりも驚いたのは、住用(すみよう)村の或部落の宿屋で、色々の青年少年が旅人を見がてら、前の川端の路を往つたり來たりするのに、一人として胴魔聲を立て〻、わめいて通らぬ者は無かつた。正月だから仕方も無いが、大きい分は皆醉つて居る。さうして彼等ばかりの風流とする事柄を、隱語で怒鳴つて笑つて行く。子供にはそんな才覺も無く、又固より酒を飲む筈も無いが、出來るだけ醉つた先輩の荒い聲を眞似て、他には何もわめく種も無いものだから、互に相手の子の苗字などを、呼捨てに呼びかはして居る。こんな氣の毒な正月が、果して何時まで辛抱し得らるゝであらうか。

今何時ですか

此子供たちに、昔あれ程澤山にあつた正月の遊はどうした。ネンと云ふのは吾々の根木又は根ん棒と謂ふものと同じで、端を尖らせた二叉の枝を土に打込み相手の木を倒さうとする勝負であつた。又イハと稱する遊もあつた。薩摩で金輪投げと謂ひ、東國では破魔ころなどゝ謂つて、圓い輪の類を飛ばして互に受留める遊は、蝦夷から南の何れの村にも有つたが、此島にも亦盛に行はれて居た。マウジヤと謂つたのがそれである。南島雜話には此以外にも、多くの遊の圖を載せて居る。それが皆どう爲つてしまつたか。子供の趣味も變るから、是非殘すと云ふことは六かしいが、他では何か代りが出來て後に、昔の遊が廢つて居る。處が此邊だけはさうで無い。

以前は童名には何カナと呼ぶものが多かつたさうだ。弘く八重山までも行渡つた風習で、卽ち吾々の古語のかなし子、或は狂言に出て來るかな法師などゝ一つで、大切なものを意味するのだが、南の方では一般にオテダカナシオツキカナシ又は世の主カナシなどゝ、最も尊く且最も大切なものを、同じ語を以て敬つて居たのである。村の平和の爲必要な年に一度の祭に、每に子供をして重い役を勤めさせた例の多いことは、起源に於て此と何か關係が有つたかも知れぬ。ヤマトの盂蘭盆に該當する八月甲子のドンガの祭の前に、シッチャガマと名けて十二三から十五六歲までの男の兒が、小屋を作つて田の神を祀る儀式が有つた。左義長の鳥小屋などよりも今一段と嚴重で、其爲に特に白酒を造り、名瀨の間切では豐作を禱る祭文も有つた。それから九月十月の境に入ると、ハツブロと稱して種下しの祭があつた。竹の皮で作つた鬼の面を被つて、家々を巡つて餅を貰ひ集め、持つて還つて一つ處で烹て食べた。斯んな幸福な儀式も、もう無くなつたやうだ。而も沖繩の方では十二月八日のウニムチー（鬼餅）今何時ですか

は、まだ子供が樂んで居る。

大人が信ぜぬやうに爲れば、祭の式は追々に遊戯に爲つて行く。其痕跡は他國にも多く遺つて居る。アッラネ若くはアスナネと名けて、蝮の害を拂ふと謂つた四月壬の日の祭などは、昔から旅人の迷惑する儀式であつた。他所から來る者に釜土の泥を投付け、或は石を打つて疵を付けたことさへもあつた。御用の役人とても、理由を話して入らぬと打たれた。其他の人々には或は火の燃切れを踏越えさせ、或は委細構はずに追拂つた。東京其他の兒童が今も唱へる、「御用の無いもの通しません」と云ふ歌なども、やはり似た風習の名殘であるが、今の大島の時計遊びの如きも、ことによる是非とも何かをして樂まねばならぬ童兒たちの、外にすることが無い爲に、自然に引寄せられた新種の惡戯であらうと思ふ。但し誰がこんな島まで之を運んで來たかに至つては、やはり大なる

一つの不思議である。

一　阿室の女夫松

屋喜内灣内でも、阿室などは殊に古い村である。阿室には男松女松と名けて珍らしい二本の大木が有つた。遠方から聞傳へて見に來る程の松であつたが、惜い哉五年前の正月の大火事に、燒けてしまつて根株ばかりが殘つて居る。御嶽の岡の昇り口に近く、トネヤ(殿屋)の西隣の、神アシアゲの廣場の端に、小高い塚形の地が其遺跡で、火事後に生れた位の子供たちが、朝から晩まで來て

遊んで居る。

神の御嶽の樹を伐つた祟りと、今でも村の人には考へられて居る。百二十戸の民家は何れも茅葺きであつた爲に、日暮方から燒け出して夜中には悉く灰に爲つたが、此二本の松樹だけは三日三晩の間燃えて居た。中がもう空洞になつて居て風がよく通るので、折々は焰を天に揚げて、非常な勢で燃えた。老人たちは之を見て、皆慟哭したさうである。村は既に建て直つて繁昌して居るが、今でも松の話をすると涙を流す者がある。

火元は濱近くに豚を飼ふ小屋であつた。山手へ吹き付ける風は強かつたが、岡一族の屋敷の奥に祀つた、辨天樣の脇の樹に、火の粉が盛にかゝる頃から急に風向きが一轉した。他の一方では學校の大きな建物も燒け落ちたが、御眞影を御移し申した碇氏の新築が、たつた一軒だけ助かつたのも奇瑞であつた。斯

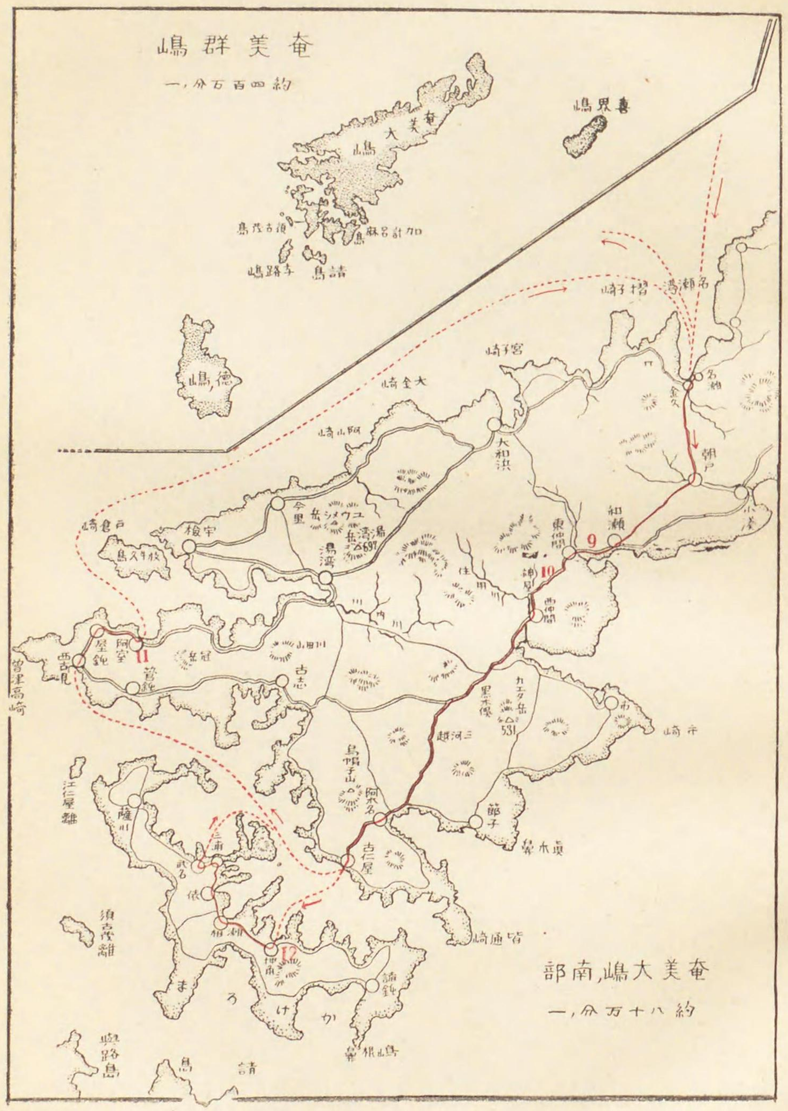
う云ふ數々の不思議に感動した村の人は、先づ急いで御嶽の拜殿を立派に營んだ。今まではシマタテカミサマ(島立神樣)と拜んで居たこの拜所を、今後は秋葉神社と稱へて崇敬することにきめた。遠い遠州の奥の山の火防の靈神が、果して何人の說に基いて、阿室の昔の御嶽の神の名に爲つたかは、敢て聞いて見ようとしなかつたが、少くとも是は我々の謂ふ勸請では無かつた。土地の人たちは決して新たに御迎へ申した神とは思つて居らぬから、卽ち單純なる改名に過ぎぬのである。社殿には御簾の中に黑く尊げな木像を安置し、又內地にしか見られぬ紙の御幣も立てゝあつたが、構造は却つて宮古の漲水御嶽などの新しい殿に近く、殊に其建物を廻つて奥の方の靈地は、干瀨卽ち珊瑚礁の石を取繞らし淨い白砂を敷きつめ、全然先島方面の御嶽のオブと同じであつた。何でも大島の神道には、昔から此程度の歩み合ひがあつたらしい、不意の感激と云

ふ特別の原因は有つたけれども、阿室の信仰には此以上に變化させる、必要も無ければ又人も無かつた。

それ故に御嶽は依然として能呂(祝女)が之を祭つて居る。再建以來一段と其信心は引締つた。能呂の數は此村は五人である。ワキガミと謂ふ者を加へて七人、白い祭衣を着て神の山に登り、祭を畢へて下りて來る迄、何人も之を窺ふことを許されぬ故に、式の樣子は只彼等のみが知つて居る。最近の神祕は火災以後の五年間、年に何回かの祭の日の夕毎に、能呂たちが下りて來ると直に其後に、御嶽の山で鉦の音がする。或は又鐵棒を曳く音とも謂ふ。つまり幾つかの金屬の器を鳴らして、岡の頂上を行く聲がするのである。村民は一人として之を人がするのだと思ふ者は無い。又互に相欺くほどに疏遠の中でも無い。稀に一度と謂ふことなら、耳の誤りとも思へるが、年に何回となく小學校の先生

も聞いた。佐賀から來て居る商人の江口君親子も聞いて居る。さうして御嶽の東に住む平田の人たちには聞えぬのである。以前信仰の今よりも盛であつた頃は、白い馬に騎つて神樣の御出でなさるのが、御嶽の昇り口の處までは見えたと謂ふ。トネヤ(殿屋)を葺換へる時の祭などには、殊に明かに拜まれたさうだ。其御姿を拜したと云ふ老人も、まだ何人か達者で居る。

能呂は必ず血筋の者が相續するが、嫁に行くから家としては次々に移るのである。他の部落に緣付いた者でも、祭の日だけは還つて來る。數ある一族の婦人の中でも、相續すべき者は神樣には最初からきまつて居る。先づセイヲヒクと謂つて、生れた年月日に由つて合性がある。火性と金性とはまるで能呂に爲る資格が無い。木水土の中でも亦條件があつて、山の上の土などは高過ぎてよくない。自分と對坐して居た親能呂の老女は、水性であつてイヂュン(泉)の水



であつたと謂ふ。そんならば林の奥の泉では無かつたらうか。至つて物靜かな生れで、湧いて流れるやうな話は出來なかつた。幸ひに沖縄とはちがつて大島には、グジと名くる男の輔佐役があつて、オモロを語り傳へ、又少しは哲學が說ける。其グジの數も五人である。やはり性に由つて神から指名せられる。神のオモラヌ(在さぬ)日には、なんぼ信心しても無用である。天に七日、此娑婆に七日、龍宮に七日と昇りに七日とを御過しなされる。一月の中に七日しか無い祭の日を、私等だけは數へることができるのだと、親グジの寶本翁(たからもと)は自分に語つた。

一二　國頭の土

加計呂麻（かけろま）は東西に細長い島だ。北に瀬戸を隔てた大島の多くの岬が、日を帶びて灣内の靜かな水に映る景色は、南の海では見られない趣であつたが、今斯うして冬の綠の山に分入り、切開かれた赭土の坂路を、昨日の雨の濕りを踏みながら登ると、再び國頭（くにがみ）の遠い山村を巡つて居るやうな感じがする。其上に折々出逢ふ島の人の物腰や心持にも、まだ色々の似通ひがあるやうに思はれた。海上は二百浬、時代で言へば三百年、もう是以上の隔絶は想像も出來ぬ程であるが、やはり眼に見えぬ力が有つて、曾て繫がつて居たものが皆續いて居る。

獨り昔の生活の痕が、殘り傳はると云ふのみでは無い。沖繩では近年階級の制限が殆ど無くなつて、婦人の簪などは上下一樣に銀色のものを用ゐて居る。

首里の王城の片脇にも、既に此ばかりを作つて居る小店が有る。處が久しい間沖繩の簪の制と、何の交渉も無かつた筈の道の島々の女たち迄が、悉く在來の簪を罷めて今は銀色のを挿し始めた。而も其形が稍長く細く、又端が劍のやうには尖つて居らぬから、南の沖繩本島の流行を追ふのでは無い。言はゞ彼等の黑い髮の毛に、白くして光あるものを取合せたいと云ふ趣味が、双方一度に表はれた迄であらうが、而も人知れず、久しく此傾きを保持して來たのは、少くとも歷史の說明を超越した、寧ろ天然の原因があつたからである。

普通の歷史には、大島群島が琉球の屬島と爲つたのを、文明三年以後のやうに書いたものもあるが、此は誠に誤解の虞有る說である。中山の世の主に些しの貢物を納めるか納めぬかは、單に或時代の浦々の按司の家の都合であつて、島人たちは夙に同じ衣を着て同じ語を話し、同じ季節と方法とを以て村々の神を祀つて居たとすれば、卽ち國は始めから一つであつたのである。それ故に所謂君々の機關が王家の制御を受け、俗界の君主が宗敎の力を利用し、之に由つて三十六島の統一策を行つたときには、北の方の島々も甘じて其節度を受けて永く渝らなかつた。卽ち征服せられたのでは無くして、草木の風に靡くが如く歸服したのである。

大島では能呂久米の首領を御印加奈之と呼んで居た。御印とは首里から出した辭令書のことで、之を持傳へた能呂なる故に、御印加奈之とは謂つたものらしい。島津家の支配に爲つた慶長十四年以後も、尙暫くは祝女だけは沖繩から任命して居たのを、寬永の初に至つて禁止してしまつた。さうして以前貰つて置いた御印が、愈尊いものに爲つた。それから後も百年ばかりの間は、一生涯に一度だけは大島の能呂久米、首里に出て往つて聞得大君に見えることを許さ

れて居たのが、享保十何年かにはそれも亦禁ぜられた。併し小舟で荒海を凌いで、潛かに國頭の土をふむ者は絶えなかつたやうに思はれる。近世の記錄に依れば、大島の能呂は何時の頃よりか二頭に分れて居た。甲を眞須知組と名づけ大和濱から南は之に屬し、乙は須多組と謂つて北部名瀨の周圍の數間切を支配した。シヰタは分家又は次男の筋を意味するやうだ。マスヂは素より嫡流と云ふことである。須多が多く傳來の法式を省略し、又大和人の刀自と爲ることを禁じなかつたに反して、他の一方は今に古法を執し、大和人に嫁することを許さなかつたとある。此派が本島の南から佳計呂麻の村々にかけての、今日迄の宗敎である。

屋喜内方には有名な湯灣五郎の話が有る。虻一匹から金持に爲つた今昔物語の話にも似て居るが、史實で無い迄も昔の趣だけは傳へて居る。五郎は湯灣の村の生れで、家貧なるが故に人之を糠五郎とも呼んで居た。後に本琉球に渡つて、出世して按司の號を賜はり、佐渡山與名原の親方等は、彼が子孫であると傳へられる。其頃琉球の風習として、國王世子の始めての宮參りには、誰にてもあれ途中で最初に行逢うた人を賴んで父と爲し、それだけ結構に取立て、按司などにも召出すことであつた。五郎は其身の微賤を耻ぢて、遙に御神詣での行列を望んで道を變へて遁げ隱れようとしたが、王子の御供の面々に於ても、あまり風體の良くない男が來るので、避けて問道を通つたが爲に、思はずも双方行逢ふことゝなつた。其名を問へば秋山の野夫湯灣の五郎なりと名乘つた。古の法なれば貴賤を論ずべきで無いと、終に王子の義父として、一躍して按司に爲されたと傳へて居る。

瀨戸の靜かな海へは木や絲芭蕉を積みに、多くの山原船が入つて來た。那覇

の港のうかれ女なども來て居るらしい。久高の島人は來て永良部鰻などを捕つて居た。暇あるときは故郷を思ひ出して、色々の歌を歌つたでもあらうが、彼等ばかりの平凡な空想からは、湯灣の糠五郎は生れさうにも思はれぬ。

一三　遠く來る神

沖の永良部の後蘭村では、沖繩世の主の墓と云ふのが御嶽で、今も年毎に遺骨を洗ふ祭りがあるさうだ。近世の琉球語では、世の主は卽ち國王であるが、骨を留める程の新しい世代に、海の北に流寓して果てられた王は無かつた上に、之と略似た昔語は亦處々の小島にもある。若し單純な能呂久米の夢で無かつたとするならば、卽ち分水嶺で限られた多くの小さい社會に、曾ては個々の世の主が支配したこともあつたことを想像せしめる。而も所謂百浦の按司たちの事蹟は、島の端々に行くに隨つて、痛ましい迄に埋もれて居る。中山の歷史家が始めて古傳を集成したのは、第六王朝も旣に百數十年を過ぎて後であつた。祖先を慕うて止まぬ山北の遺民に取つて、今歸仁王都三代の榮華は、偏に一抹の山の霞の如きものであつた。

北山古城の本丸の迹には、勇猛なる最後の王攀安知、劒を拔いて斫つたと傳ふる、嘉那比武の神石が今尙在る。逆臣本部大原の謀計に由つて、鬪ひに勝て還つて見ると、城は空虛と爲り妃嬪は悉く縊れて死んで居た。護國の神今は何かあらんと、大に憤つて其神石を劈き、分つて四塊と爲したと謂ふ。石の長さ

五尺許り、青色堅實なり、十文字に割れて居ると、遺老說傳などにはあるが、今見るところは二尺以内の灰色の石で、堅に只二つに割れて居る。遺老傳は二百年前の書物、其前がまだ三百年ほども有る。此だけ永い歳月の間には、幾ら石でもちつとは變化しさうなものだ。それにも拘はらず毎年夏秋の境には、遠近の村々から依然として萬を超ゆる土民が、此古跡に登つて來て、家々の拜所(はいしょ)に香を燒いて巡るのである。

思ふに是も亦、至つて自然なる人の心であつた。昔は固より過ぎて形を留めざるものゝ名であるが、猶之を思ひ慕ふとすれば、眼に見え手に觸れる何物かに據つて、辿つて行かねばならぬ。而も都城は覆り史書は絕えて無く、祖先の日は益々遠ざかつたのである。身内に別れて寂しい不幸の日を送つた者は言ふに及ばず、富榮えて眷屬の多い人々でも、田舍では徒然なる夜の物語などに、

此世の始と我家の始を、もつと精彩に知らねばならぬと、考へる折が多かつたことゝ思ふ。而うして此要求に對しては、村々には物知りと稱する女性が居た。

物知りは沖繩の方では、ユタと呼ぶ方が普通である。大島佳計呂麻などでは正神(しやうがみ)、又ホゾンカナシとも謂つて居た。本尊と賴む神佛の力に由つて、只の人には見えぬ者を見る。故に其謂ふことが信ぜられた。今まで不明であつた高祖の名でも事業でも、之に聽けば忽ち闇の園の燈火であつた。乃ち導かれて處々の故迹を巡り、絕えて久しい祖先の俤に對面した。唯不自由なのは北に寄つた山邊海邊には、花やかに延び榮えた思ひ出が如何にも少ない。優れた武士は戰つて多くは斃れて居る。又は南の平野から、遁げて來て世を狹めた。ユタとても信ずべからざることを語ることは出來ぬ。そこで國頭(くにがみ)の古い歷史は、終に晴れたる海の色の如くなるを得なかつたのである。

尙圓王の興隆は此點から見ても世の濟ひであつた。此王は沖の小島の伊平屋から身を起して、以前の鮫川大主などの如く、直に小舟を遠い佐敷の濱に寄せず、海を横ぎつて宜名眞に移り、奥間に遁げて鍛冶屋に助けられ、漸く南して久志の間切に入つたが、美しい汀間のミヤラビ(少女)を娶つて、爰に又二男一女を儲けるほど留つた。此傳記の何れかの部分は傳說かも知れぬ。而も人は信じたいと思ふものを信じ易い。八郎爲朝は菊池幽芳君を須たずして、既に立派な沖繩の英雄であつた。況や國頭の物知りたちは、寂寞として久しく此の如きニライ神の、遠くの島より寄り來らんことを待つて居たのである。

自分は雨のふる或日の午後、福木の高く茂つた汀間の里を訪れた。山には躑躅が咲き鳥が鳴いて居る。若い英雄の戀語りを傳へた金丸川の泉は今も流れ、若し此日が夢ならば尙更に美しいがとさへ思はれた。金丸御殿に仕へるのは由

緒ある昔のノロであつた。久志村の青年等は、ユタをば最早正しい職務とは認めて居ない。もし彼女に新しい豫言と啓示があらば、乃ち之を信ずまいとする故に、古くからの夢語のみが、愈ゝ歷史として固定して行くらしいのである。而も此から後の百世に對する我々の好意と期待、又自分ですらも忘れて行く數數の愁ひと惱みは、實は民族の感情に最も鋭敏な、やさしい女たちの力に依らざれば、迚も文字などでは傳へて置かれないのである。

汀間の入江の岸には、歌で名高い汀間の神アシアゲがある。壁も簀子も無い森閑たる建物で、二列に繞つた澤山の柱の間から、遠い大洋の水が眺められる、初夏の曉の靜かな海を渡つて、玆に迎へらるゝ神をニライ神加奈志と島人は名づけた。大島でナルコ神テルコ神と謂つたのも同じである。而も北東に面した久志の沖は、餘りに茫洋として居る。伊平屋久高が神の島として遙拜せられ、

人界の英俊も之に據つて出たのは、やはり我々の空想にも、何か具體的の飛石を必要とした爲ではあるまいか。

一四　山原船

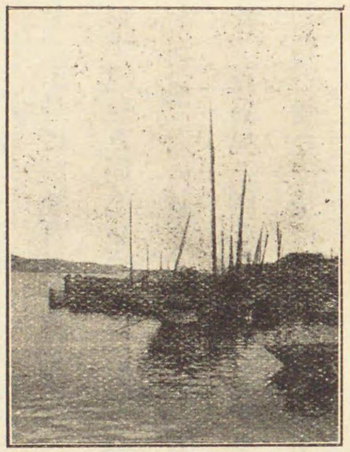
恩納の仲泊から美里の石川まで、島の幅が此邊では僅に三十町しか無い。大昔神が未だ草木を以て此國を惠まざりし頃、東海の波が西海へ打越し西の波は又東へ越えたと傳へるのは、或は此近所の事かも知れぬ。今でもサバニと稱する小さな刳舟だけは、人が擔いで陸の上から往來し、遠く邊土名喜屋武の岬を廻るの勞を避けて居る。內地の府縣で船越と云ふ多くの地名は、何れも曾て此方法に由つて、小舟を別の海へ運んだ故跡である。島尻郡の方にも玉城村富名腰が有る。又同じ郡の佐敷村、八重山石垣島の伊原間などに、フナクヤと云ふ地名があるのは、皆この船越のことだらうと思ふ。

近い頃までのサバニは、皆國頭の山の松樹を刳つて造つて居た。絲滿の漁師たちは遠く屋久島の杉を買求めて、追々に其船を改造し、猶鱶の脂を船と船具とに塗つて水を防ぎ、飽くまでも輕快に海上を馳驅しようとして居る。而も山の良い樹は次第に乏しく、眞の丸木舟はもう殆ど見られなくなつた。刳舟の緣にも他の材を綴附けて形を作り、其隙間を白い添喰で留めて居る。仍て又綴舟の名もあるのである。

道の島では小舟をスプネと呼んで居る。クルブニの名は今も有るが、もう其

姿を見ることが稀で、之に代つて板附（いたつけ）と謂ふのが多く用ひられる。板附も形は絲滿（いとまん）人の刳舟に近いが、大小の板を釘で打付け、艫の方にも三角の板が角を下にして張つてある。此板には墨と一二の繪具で、古風な模樣を描くのが習ひである。其中でも瀨戸の入江で幾つか見た三本杉のやうな繪樣などは、本來南の島々には無い樹であるだけに、何か熊野の信仰とでも因が有るかと思はれてなつかしかつた。

遠い國地の珍らしい文明を、先づ見て來るものは船であつた。それ故に最初は蒲葵（びろう）の帆を掛けて支那の物見の役人を驚かした島人も、久しからずして福州あたりの造船所に依頼して、新しい立派な進貢船を造らせ、次では那覇の船大工が其型に由つて、大きい船を工夫するに至つた。淋しい山原の磯山陰で作り出す船が、西南數百里の外を走つて居る支那のジャンクと、此樣によく似て來



那覇の湊

たのも偶然では無かつた。而も其改造の更に以前を遡つて見ると、島人は出でゝ新しい物を覓めんが爲に、兎に角に自ら渡海の船を持つて居たのである。

島では人よりも船の方が早かつたわけである。然るに八重の汐路の先島（さきじま）に於ては、アマミコが碧空より降つたと云ふ神話はもう無くて、却つて船の始の物語が傳はつて居る。竹富島では島仲粟禮志（しまなかあはれし）の幼き兄妹、或日濱に遊んで形半輪の月の如くなる物が、海上に漂ひ來るを見て、木を伐つて其制に倣ひ、始めて船と云ふものを作り、之を五包（つゝみ）七包（つゝみ）と名けて濱に泛べて樂みとした。其玩具の小船、後に又流れて隣の黑島に行き、黑島の人は

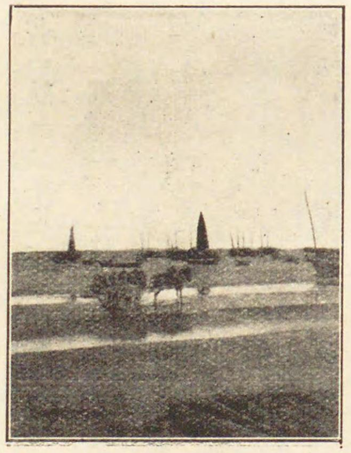
山原船

之を大きく拵へて、漕ぎ乘つて竹富に遣つて來て、始めて子供たちの神から學んだ術であつたことを知つたとある。

同じ話の變化かと思ふ話を、又宮古島の仲間御嶽にも傳へて居る。狩俣村で小舟を造ることの好な子供、父が中山に往つた留守に父の船を眞似て小舟を作り、父を思ひつゝ毎日海に浮べて遊んで居ると、或時風波荒れて小兒は溺れ死し、小舟ばかり百里の海を漂ひ、那覇の港に流れ着いて、父之を拾ひ上げた。形が我船と同じいのみか、仲間嶽の靈石が之に載せてあつたので、我兒の運命を知つて大に歎き、且小舟と靈石とを携へ還つて、今に之を尊信すると謂ふので、稚い兒と神とが此の如く、共に最初の造船には干與して居たのである。

昔の船の安全は半ば之を神の力に托して居た。八重山の船は蜈蚣の形を眞似て、イノー(龍卷)を制御する手段とした。今の山原の船にはちやんと眼球が描

いてある。瞳を稍片脇へ寄せて、支那の船よりも一層眼球らしいが、如何なる理由でか之を艫の方に附けて居る。而も害敵を防ぐの術としては、此だけでも十分であつた。現に十八年前にバルチックの艦隊が來た時にも、或山原船は港の燈火と見誤つて、洋上に假泊して居た怖ろしい敵の眞中に船を漕入れた。其頃まで髻を附けて居た國頭の船方たちは、其語音を聞いても到底日本の愛國者とは見えなかつた爲に、何の仔細も無く放された。それから大に走つて八重山に來て電信を打つたが、其時にはもう對馬海峽の大戰は終つて居たさうである。時間が其樣に大切な場合には、彼等も今は機關のある船に乘つて



場天の濱と山原船

居る。絲滿の漁民なども刳舟を定期船に積んで、自分も船客と爲つて內地に往來する。さうして船に醉うたりなどして居る。昔の航海は年に一度の風をでも待つた。永い年月の間に、子が親となり祖父と爲る期間に、人は徐々として偉大なる變化をしつゝ進むだのである。

一五　猪垣の此方

昔からの村には泉に據つて、山の中腹に住むものが多かつた。島が平和に爲つてから、次第に廣場へは下りて來たやうである。近世は又山林愛護などの爲に、法令を以て村を遷した場合も有つた。村の周圍には燃料其他の用に、若干のアタイバル（垣內山）を付與し、殘りの山野は公共の地であつた。原屋取と名けて首里那覇の困窮人が、入込んでは新しい部落を立てたのも此原である。明治以後の屋取人は、今でも質素以下の暮しを續けて居る。彼等の大部分は元の侍であつたが、剛健なる山原の氣風を毀すほど、町風の生活には前からも染みて居なかつた。さうして爭うて好い兒を育て、家運を興さうとする努力が、附近に居る舊住民の爲にも一の刺戟になつて來た。

霜雪も知らぬ山ではあるが、やはり天然の力と鬪はねばならなかつた。峰續きの隙間も無い林から、緩傾斜の一角をかこひ取つて畠に拓かうとするには、長い石垣を築き繞らして、山から來り侵す者を防止せねばならぬ。紀州の南熊野、又は豐後日向の境の村などで見たものと構造が同じで、國頭に於ては之を

イヌガキと呼んで居る。狗は内に在つて守る者、猪垣を狗垣と謂ふ筈が無い。是は尙昔の語の名殘であつて、曾ては野猪を單にヰと謂つた時代に、ヰの垣と呼んで居たのが、意味無しに傳はつたものだらう。

今日では野猪はヤマシシと謂ふのであるが、之に由つてシシガキと云ふ語を作るにはまだ故障が有つた。何となればシシは沖繩では、宍卽ち食用の獸の肉の總稱であつて、今の我々のやうに只一種の山の獸を、意味しては居ないからである。

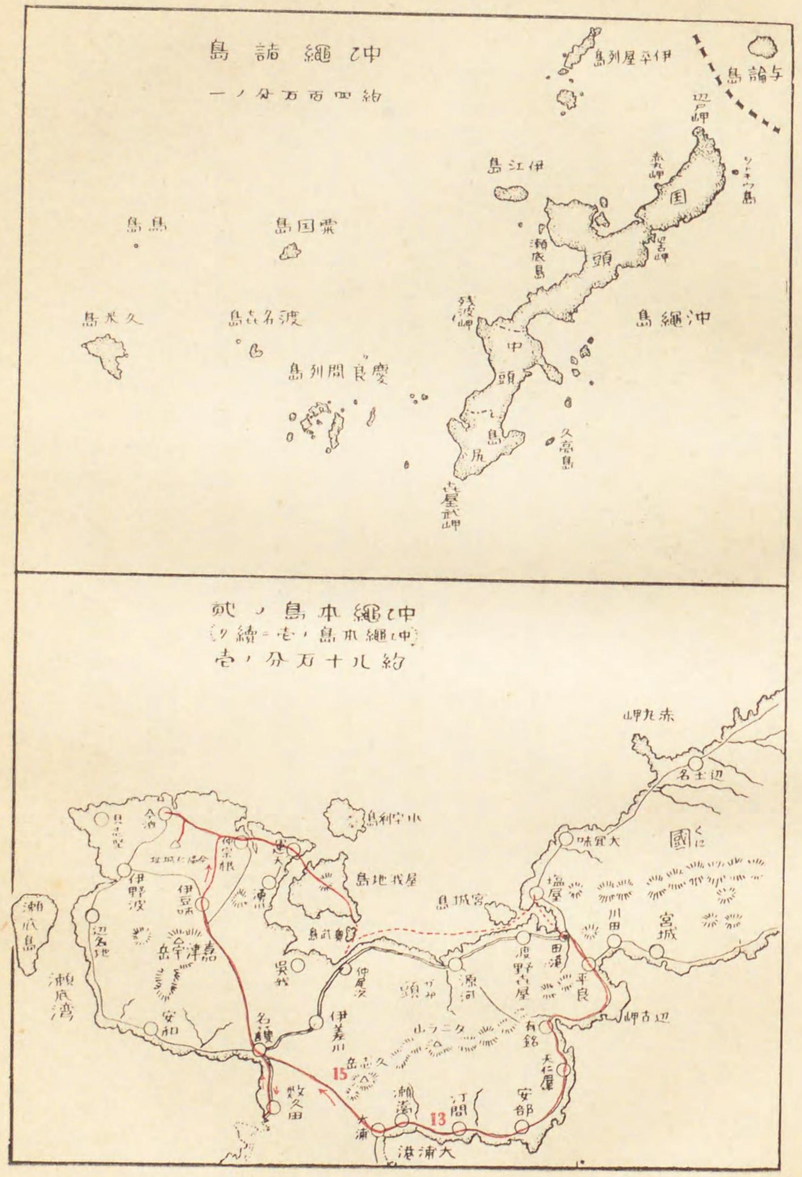
內地の方でも田舍に往つて見ると、シシが宍人部などの宍と、もと一つの語であつたことが直に分る。例へば鹿をカノシシと謂ひ、羚羊をアヲシシ、カモシシ又はクラシシなどゝ謂ひ、九州の北の島などには、牛を田ジシと呼ぶ所さへもある。唯宍を食ふ慣習が夙く衰へた爲に、何故に肉を以て獸の名とするか

を、久しく忘れて居たと云ふだけである。沖繩の方では引續いて宍を用ゐて居た。故に山のシシ卽ち野猪に對して、牛を田のシシと謂つたのが最も自然である。鹿を產するは慶良間群島の、座間味の島だけに爲つてしまつたが、カノシシの代りに之をカウノシシと呼んで居る。鹿の宍に一種の臭氣がある爲か、さうで爲ければ其鳴聲に由つて付いた名であらう。

豚は一般にワと呼んで居る。チエンバレン氏の語典には、羅馬字でwwaと書き、鳴聲から來た名であることは、誰も疑ふものが無い。先島の人たちはwwoと謂つて居る。さうして見ると豕

ワを頭に載せて賣りに來る
女の衣は右の袵を上にして居る

猪垣の此方



ノシシのヰも、其理由は同じやうに簡單で、我々も一度は其ウィー〳〵の聲に耳馴れる迄、親しく接して居たことが知れるのである。それを忘れてしまつて山に住むのをヰノシシ、家に飼ふのをヰノコなどゝ、區分したのはをかしかつた。尤も沖繩でも、區別の爲に一方をワ、又他の一方山に居るのを、ヰと謂つた時代があつたかも知れぬ、前に申したヰノガキの外にも、婚禮の式の改まつた料理に、必ず出さねばならぬ野猪の吸物を、ヰヌムルチなどと呼ぶ例が遺つて居る。

正月の食べ物には、餅よりも更に缺くべからざるは卽ちワノシシである。暮には大抵の家でワを屠つて、我々の彼岸の牡丹餅のやうに、遣つたり取つたりを盛にする。此にも久しい由來の有つたことゝ思ふのは、豕の記憶は最早失つた內地の國々の武家に、春の初の野猪の料理を重んじたことである。支那と交

通して居たから支那から來た風習だらうなどゝ、よい加減に珍しがつて置いても今までは濟んで居た。斯うして古い日本は埋もれて行つたのである。

北太平洋の島々には野猪は到る所に住んで居た。島に猪が居り又土人が居れば、必ず之を捕へて來て家に飼うて居る。野猪が家猪に爲るのはそれ程手輕であつた。馬や猿ならば藝を仕込まねばならぬが、猪は檻の中で繁殖さへしてくれゝば卽ち家畜である。獨り馬來の島々の回教徒は之を惡み、山に居るのをも忌んで却つて跳梁させた。我々の島では少しづゝ食つたが、活かして貯へる程の必要は無かつたから、そこで昔の猪養(ゐかひ)の徒は轉業した。田神(たのかみ)の祭に供へ來つた白い猪の種も切れて、近江の山で生捕つたヰノシシに、胡粉を塗つて間に合はせたと云ふ話も殘つて居る。さうして山にも澤山の山シシが住むのに、同じやうな黑い小さいのを、遙々船に積んで沖繩だけへ、持込んだ人が有ると云ふ

ことに、きめられやうとして居る。

奄美大島にも山にはヰノシシが居り、里にはワが孳殖して居る。少なくとも三百餘年の分立前から、ワは既に島人の生活に伴うて居たのである。更に今千年ほど前に溯れば、大和の京でも其通りであつた。我々は只猪垣の此方の側で寧ろ不自然なる生活をして、宍を食はずに居たのであつた。

一六　舊城の花

歌に名高い浦添城外の廣場は、後に久しくこの間切の番所であつたが、世が又改まつて爰に大きな小學校が建つた。さうして櫻が咲いて居る。桃よりも彼岸櫻よりももつと紅い花で、去年の葉の陰に咲いて居るのは殊に珍らしい。眞青な明るい大空が、花と故城とを蔽うてぢつとして居る。昨日が立春と謂ふ二月の四日だが、吾々の内地の五月のやうな日の光である。

城の石垣の上に立つと、干瀬の美しい東西の海が一度に見える。島の歴史の八百年が見える。嘉津宇嶽の向の麓が運天の港で、彼處には百按司の骨が朽ちて殘つて居る。身長が六尺何寸、弓は三十人力と云ふ青年將軍が、大和から漕寄せてそこに上陸し、渚傳ひにのつし〳〵と遣つて來て、やがて此下の牧港を出て還つてしまつた。殘波岬の波は其時分から、今に至る迄此島の女たちが、眺めては泣くべき波であつた。恩納岳は東へ靡いて山の姿がしほらしい。あの麓では女詩人の恩納なべが、戀を歌ひ又大王の德を頌した。

殘波を見下して座喜味の城山が聳えて居る。昔山北の鎭めに此城を築いた時は、鬼界大島からも人夫が來て石を運んだ。讀谷山に居た間は護佐丸も安泰であつたが、如何に堅固の要害でも、中城はあまりに勝連の城に迫つて居た。それ故に終に奸雄阿麻和利と、兩立することが出來なかつたのである。而もそれがもう物語と爲つた。斯うして見ると唯香久山と耳梨山の、昔の爭を思出すばかりである。

南は佐敷大里の山々にも、曾て幾度か矢叫び鬨の聲が山彥を喚んだ。英雄の鄕里は必ず多事であつた。其間には又巫女の最も靈なるものが、夢から覺めて神異を語り、或は遠い國から小船に乘つて還つて來た。世治まつて人の信仰か稍平凡に流れようとすると、忽ち神女は與那原の沖に天降り、薄紅の狹霧に包まれて入江の水に浴みした。此ほど迄に歷史は單調を憎んだけれども、而も今

見る物は只の林と、海と砂濱との他に何が有るか。

此城なども榮えた時世よりも、淋しい間の方がずつと永かつた。あかい櫻が山に咲いて居た無爲の日に遣つて來て、恐らくは或日の大和の船頭殿加奈之も茫然として此昔を眺めたことであらう。如何なる種類の船頭殿であつたか、それも悉く今は不明に爲つたか、安波茶の友盛御嶽は卽ち此人の塚で、永く旅客の神として祭られたと謂へば、來て居たことだけは確かである。日秀上人の來た頃にも、もう沖繩は平和であつた。但し邑人が餘りに妖怪に惱まされるのを氣の毒に思ひ、一字一石の經を寫して經塚を築くと、それが後には又御嶽と爲つて拜まれる。爲朝公の北の方若君が、船出の別を惜みに來たと云ふ牧港の岩屋なども、固より立派な拜所で、南に峙つ英祖の森城、此浦添の城の神、さては北の陰に世を隔てたヨウドレの古陵と共に、史蹟は總て皆香の煙を以て保存

せられて居る。さうして史蹟でも無い空(から)っぽの昔が其煙のやうに薄れて行く。

首里の岡には松がまだ茂つて居る。浦添から見ると少し低くて、百浦の山を見渡す雄大な趣は此に及ばぬのに、夙に文明の中心が彼方へ移つたのは、單に風水の敎への爲ばかりでは無かつたらう。王都の氣勢を支持すべき海の津が、那覇と泊に於ては猶深く、安謝(あじや)と牧港は先づあせた。山を拓けば土を流す、泉を汲めば流れが細る。つまりは早く榮えたが爲に先づ衰へたのである。併し處は衰へても、人は移つて猶榮えた。浦添の按司が立つて中山に王と爲れば、鐵を積んで牧港に來た大和の船も、やがて泊の橋の下に、紙や絹を運んだであらう。況や陸より行けば手が屆くほど近い。松を並木にした石道の珊瑚岩を、朝出ては暮に戻る幾千萬の男女の足が、斯うして石の角の圓くなる迄、登り降りをしつゝ、終に又新都を古くした。

首里は清水の永久に美しい町である。百浦添(もうらそへ)の南の芝生には、盛んに大葉酸(おほばかた)漿(ばみ)の花が咲いて居る。

一七　豆腐の話

沖繩の新聞に依れば、那覇の遊女病院には、何時でも七八十人からの若い女が入つて居る。之を見舞ひに親切が三分、風流が四分と云ふ位な友人たちが、毎日何人か遣つて來る。見舞の品物は、以前は主として刻煙草であつたが、此頃では豆腐が多いと云ふことである。若い女には法律も怖いが、それよりも公

然煙草をのんで居ると、未成年者で無いと思はれるのが、猶一層こわいのであらう。それに比べると、豆腐は誠に罪の無い流行である。

暖かい南の國で有りながら、沖繩にはどうも白い色が豐かで無い。野山は一樣に冬も深い綠で、處々に花の紅を以て點綴する。島を取繞らす干瀨（ひぜ）の浪だけを例外にして、大小の船の帆にも褐色のものが多い。鷗の羽の色も必ずしも白では無い。濱の眞砂の一文字も、遠く見れば所謂クリーム色であつて、之を運んで敷きつめた作り路も、リボンのやうで美しいが、やはり黃を帶びて綠と映じて居る。人間に在つても白を重じ過ぎたと云ふものか、日常の生活には他の色のみが多く行はれ、島人は殊に年久しく山藍（やまあゐ）の香を愛して、其色に親しんで居たのである。普通の家の臺所などは、どこの國でも白いのは鹽ばかりで、勿論沖繩だけの特色とは謂はれぬが、實際これ迄の民家の色は、此島では頗るく

豆腐を賣るところ

すんで居た。今や因習の縛が時代の手にほどかれ、ちやうど朝鮮で平民の衣服が、晒しから染へ復つて來るやうに、琉球の家庭で白の自由を求めるとするならば、趣味の變化が豆腐から始まるのは不思議で無い。第一には物が手輕である。それにあの白さと云ひ柔かな光と云ひ、古色に倦んだ永年の眼を休める爲に、假に豆腐が食ふ物で無かつたならば、見る物としても亦必要であつたのである。

豆腐の色は常に新しいが、其流行は殆ど極度に達して居る。西宿（にしじく）の名護街道などを通つて見ると、買ふ家の數よりも多くは無いかと思ふ程、どこの家でも

豆腐を賣つて居る。表を圍うた石垣の片端、例のガジマルの樹陰などに、麥酒箱を少し毀してそれへ板硝子を嵌め、僅かの豆腐を竝べて其箱を枝に吊り、又は杭の上に載せて居る。所謂人無しあきなひである。傍に寄つて覗くと、多い時も二挺か三挺、或は庖丁で切つて半分だけ賣るものもある。買人が無ければ晩には引込めて、我家で食つてしまふのであらう。

以前は斯うでは無かつたさうである。察する所他府縣とは違つて、豆腐は家家で手作りにするのだが、器の都合などで一日の用ゐには餘るのを、かこうて置くよりは望み人が有れば讓つてしまつて、明日は又新しく作らうと云ふ、家(いへ)刀自(とじ)の才覺からで、而も考へて見ると海道の軒の草鞋や馬の沓、元は斯う云ふ類のあきなひが他にも多かつたのである。それが豆腐を食ふ家の多くなるに比例して、軒竝に小さな豆腐屋を見るやうに近頃爲つた。有名な豆腐屋へ二里の

219124

宮古島の豆腐

邊の豆腐は絞つてから後に烹ると謂ふ。箱も蓋も共に釜の中へ入れると見えて其押鮓の蓋のやうな下駄が、黑く水じんで居る。或は又我々の雪花菜(きらず)の如く、大きな桃の形をした豆腐もよく見かけた。夫を四つにも八つにも切て賣る。野武士の如き剛健なる豆腐である。華麗纖細なる都の絹漉(きぬごし)どもをして、面を伏せ狂歌などは、まだ此境涯を知らぬのであつた。

肥後では琉磨(くま)の下駄ふみ豆腐などゝ謂つて、人吉領では低い木の臺に載せて賣つて居た。沖繩でも同じやうな臺を用ゐて居るので、よく見ると夫は豆腐を作る箱の蓋を逆さにして其儘用ゐて居るのであつた。此

氣萎えしむべき豆腐である。それをば不幸なるアングヮたちは食べて居る。

辻の一廓には按摩の笛は無い。又ちりん〳〵と鈴を鳴らして通るのは、只三世相の先生だけである。併しもうトーフイの聲は衢の夕を壓せんとして居る。田舍の邑里にも二里一里の間に、眞の豆腐屋が今に出來るだらう。そんな未來には構はず貞淑な女たちは、默つて豆腐を作つて居る。首里から岡を越えて那覇へ出る道を、晴れた日には幾人と無く桶を頭に載き、泊の製鹽場に鹵汁を汲みに往來するのは、何れも白い豆腐の樂みを隣人と分たんが爲に、勞苦する所の女性である。以前は濱に下つて海の水を汲んで還つたさうだ。松風村

沖繩で白く且つ美しいもの
舊正月二十日の遊女行列

雨の昔とても、潮汲むわざはさう風流では無かつた筈である。

一八　七度の解放

平敷屋朝敏、才華は在五中將の如く、生涯は猶遙かに數奇であつた。どこの國でも策略を以て、老いたる政治家と鬪へば敗れる。彼が十四人の同志と共に安謝の濱邊で斬られたのは、其三十六の歳であつた。妻は官に沒せられて婢と爲り、孤兒は與那國の島に流され、今はもう家の衰運を歎くべき子孫も殘つて居らぬ。

天久（あめぐ）の人里をすこし過ぎて、安謝の悲しい故跡へ下りて行かうとする阪の口に、道に面してナヽユーフィの墓が有る。近世式の見事な墓穴の前に、石を建てゝ詳しく故事を錄して居る。ナヽユーフィは七度身を賣つて奴と無り、七度身を贖つて後終に長者と爲つた人である。父に事へて斯程迄に苦しんだ故に、至孝には天の御褒美が有つて、其末永く昌えて所謂血食の幸を享けて居る。

路を隔てた岡の田を、又七ユーファと呼んで居る。孝子が月の光で耕作をした遺蹟だと謂ふさうである。卽ち連綿とした同じ家に、傳はる物語であらうのに、而も遺老說傳の七與平利富（なくよへいりふ）を此地であつたとすれば、二百年前には全く別の由來記も有つたのである。漢文で書いた爲に精確で無いが、往昔の世天久に七人の男あり、共に身を某家に賣つて僕と爲る。家主は安謝の境に在る百二十歩の田圃を彼等に與へて、其利用の費に備へしめた。七人は善く主家の爲に勤め、暇ある時には兼て私用の田を耕し、數年の中に若干の米を貯へ、之を納めて七人一度に身を受けた。之を聞く人皆奇且異なりとし、遂に其地を名づけて七僕贖身之圃と謂つた。俗に七與平利富と稱すとある。ユーフィと謂ふのは、赦免を意味する古語かと思はれる。而して七つを一人の事と解すれば、其奇は愈傳ふるに足るのである。

昔の奴婢の主は此ほどに寛大であつたが、而も身賣には年季と云ふ制が此島には無く、いつ迄經つても身の代（しろ）を償はねばならぬこと、恰も我々の本物返（ほんものがへ）しの如きものであつた。氣根の弱い者には一度でも身は拔けぬのに、七度とは誠に恐ろしい忍耐である。子孫に非ざる者も景慕せずには居られぬ。但し我々が若しユタなどの告げに逢ふならば、更に一歩を進めて聞いて見たいのは、其七ユーフイの高祖の又前の親は、果して如何なる事業を心掛けて、最愛の忰を七

度も賣らねばならぬ程、金穀の必要を感じて居たかと云ふことである。或は寒中に鯉や筍を註文するやうな、舜の父のやうな分らぬ人では無かつたか。

自分は曾て楊子江を溯り武昌に遊んで、李白の詩に名高い黄鶴樓に登つたことが有る。樓には題詞が多く、坂路には乞食が多かつた。其石段を半ば降ると、前に行くのは出羽海見たやうな親爺さんで、其衣裳に全く隱れて、青い青年が一人附添うて居る。別に痛風でも無ささうな老人だが、ステッキはかう突くものと云ふやうな手をして、息子の肩を力一杯に摑んで居た。多く見た中でも此孝行が最も慘酷であつた。支那の孝道は宗教であるから、之を論ずると冒瀆に爲るが、我々日本人には幸ひにして、天下の人の父と共に、孝行を受けるの道を講究するの自由が有る。七ューフィの父の如きは、正しくユタの夢にも現れる資格の無い、惡い魂であつたらしいのである。

所謂男逸女勞の問題なども、之と同じく二通りの見方がある。刀自が夫を思ひ子女の行末を考へて、働かずには居られぬのならやさしい心掛けだが、所謂妻子珍寶及王位の思想では、もう我々がぢつと見ては居られぬ。多分そんな動機からでもあるまいが、沖繩には時としては、良い兒の出世と共にひどく安心して、働けなくなつてしまふ親が少しづゝ有るらしい。此は其家に取つては不幸な出來事であるのに、之を又羨んで中途から、金を出して親に爲つて見たい人が居て、取子の習ひがいつ迄も濫用されると聞く。

妻を求める爲に貯蓄せねばならぬ國の人を、氣の毒なものだと我々は常に謂つて居るが、村と村との間に遣るのを損と考へ、家と家との間に貰ふのを得とするやうでは、是亦一種の孝行貞節の評價ではあるまいか。中學の生徒には嫁の入用な筈は無いのに、處に由つては入學の條件として、不婚誓約をさせる必

要があると云ふ話もある。幾ら誓約しても道德を改良せぬ限りは、古風な勞働組織の束縛は止まぬであらう。どうか今一度健氣な多くの好青年を解放して、自由に心から其親を愛せしめたいものである。

一九　小さな誤解

上

虛誕は書いて無くとも江戸時代の來聘記の類には、琉球を異國と見て珍しがつた形が有る。之に比べると馬琴の弓張月の方は、利勇と毛國鼎とが爭つたり爲朝の助けたのが尙寧王の姫君であつたり、わざとかと思ふ椿說は多いが、氣樂に時代の距離を短縮した一點を除けば、其態度は所謂寫實であつた。國性爺などゝはちやうど正反對に、我々二つの島の者が大昔手を分つた同胞では無いかと云ふことを、此書に由つて感じ始めた者も多かつたやうに思ふ。さうすれば又尊敬すべき一の先覺者であつたのである。

忠臣毛國鼎の如きは此椿說に由つて、太田道灌同然の從容たる態度で、辭世の三十一文字を遺したことにせられて居る。其歌が大出鱈目で、今評判の笑ひ話であるが、猶辯護をすれば中世の沖繩武士に、假に此種の文雅と高尙な名譽心が有つたと見ても、それだけは必ずしも無理な空想でなかつた。支那の學問に向つては、沖繩には五山僧以上の獨占者が有つた。久米村三十六姓の末は卽ち是で、彼等は之に由つて此方面の交通を立塞いで居たのである。其階級を除

いた一般の上流に取つて、文藝の標準はやはり山城の京であつた。關東奥羽の果よりも、更に因縁が薄く見えるのは、單に路の遠近に比例した迄である。

二百餘年前の混効驗集を見るに、伊勢や源氏の物語類から、徒然草太平記など迄が豐富に引用せられて居る。是が慶長の琉球入以後に、悉く薩摩を經て持込まれたものと考へる人は誰も有るまい。舊文明の誇りとしては、大和にも例の無い平假名文の石碑が、十幾つか殘つて居る。何れも唐風景慕の最も盛な、十六世紀に屬して居て、而も借物とは思はれぬ程度に、島の言語を書現して居る。公式令から頽れた我々の唐風に反して、此時代の下し文も假名書きであつた。書體は世尊寺樣だと謂つて居る。月の十八日の和歌會の式に、細道の文臺を說くなどは、大内菊池等の風流大名たちと、異なる所が無かつたのである。

聖禪二道の僧も多く入つて居る。權現の信仰は專ら熊野の系統であつた。彼等に假令傳道の志は有つても、互の湊に訪ひ寄る船が無かつたら、又其船人の胸の中に、似通ふ何物かゞ無かつたら、萬里の波濤を越えて來る因緣は結ばなかつたらう。後に航海が自由で無くなつて、寺も增さず名僧も出ず、古來の神道のみが引續いて全盛であつた爲に、沖繩の文明史を研究する人々に、此影響は至つて輕く見られて居るが、而も少なくとも名目なり外形なりに、今存する痕跡も決して幽かでは無い。況や宗敎こそは平民一般の風潮に、根を持たねばならぬから衰へもしようが、彼等歸化の大和人は、必ずしも此ばかりを携へては來なかつたのである。

例へば袋中大德の琉球神道記の如き、内地へ持て還つて久しい後に上木をしたが、沖繩の見聞錄に費したのは其一小部分だけで、主としてはあの時代の普通學とも謂ふべき天竺震旦の略史、佛敎の傳來や十三佛の由緒などを、島の人

に語らうとした說經の種本のやうなもので、神々の緣起は專ら安居院（あごゐ）の神道集に依り、暗記のまゝを書置くとあるを見れば、其目的は推測が出來る。所謂知識階級に接近して善根を栽ゑしめる爲には、恐らくは先づ彼等のゆかしがつか大和の事を多く語らねばならなかつた。此點に掛けては九州の偏土も事情は大差が無いのである。番にも訴訟にも京へ上らなくなると、遠國の莊園へ文化を普及する方法は、內地に於ても旅の法師以外には、もう無かつたのである。

斯る個人的の交通でも、久しく續いて居れば生活の上に影響した。鑛山に乏しい島の社會にも、悲しい哉、武器と金銀とは夙く入つて居た。絹と珠玉とはやはり重ぜられた。歌や言語の上にも鎌倉趣味が傳はつて遺つて居る。浦々の按司を都に住ましめて、中央集權の實は大に擧がつたが、尙言語の統一が十分には行はれず、首里の官話が常に特別に上品と認められたのは、卽ち外來語の採用に由つて、爰ばかり着々と物言ひが變つて居たからである。チェンバレン氏の琉球語研究は誠に辛苦の著であるが、其中に「う入りみしぇびり」や「いめんしぇびらん」などの二三の敬語の例を示して、日琉の言語の間に大分の隔絕が有るやうに、考へさせただけは無理であつた。此は都で中代に發達した「いらつしゃいませ」の類であつて、只首里那覇の上流のみが之を用ゐ、宮古八重山は勿論、すこし田舍へ行けばもう常人は、今尙之を用ゐて居ないのである。

下

沖繩人が沖繩語に愛着するのは當然の話である。所謂普通語の如何に達者な人たちでも、互の間では之を使はぬやうにする。今の程度で二通りの語が、併用せられて行くことを望んで居る。伊波君などの沖繩口の講演は、非常に好い

感じを以て聽かれて居る。やがては此で書いた本なども出ることゝ思ふ。自分は是が一種の國語運動であつても、猶贊成をする積りであるが、而も遺憾ながら終には徒勞に歸するだらうと思ふ。其理由は極めて簡單である。沖繩語にはまだ統一の事業が完成して居なかつた。統一の基準と爲るべき首里那覇の語には活力は有るが、それが有り過ぎて却つて盛に變化して居る。是では保存の方で追付くことが出來ぬと思ふ。

今後は益さうであらうが、以前とても久しく此變化を續けて來たのである。島の外には新しいものが常に在る。一つの事物乃至は心持が入つて來る度に、必づ二つ宛の語を用意することは不可能である。新語の採用には我々も豐かな經驗を持つて居るが、支那で製した耳馴れぬ名稱などを、何とかして歌に詠めるやうな、風雅な語に引直さうとして見たけれども、自轉車をヲノコログルマ

と謂ふ類はとう〳〵通用しなかつた。所謂和歌和文の特殊文學が有つて之を註文してさへも、漢語の跋扈を制御することが難かつた。況や沖繩の方では眼の言語は、ずつと昔から大和と共通であつたのである。中でも官府の記錄文書などは、如何して斯う迄に練熟し得たかと思ふほど、完全なる罷在や奉存を綴つて居た。偶一二の變つた用語が有るかと思へば、それも西國一帶の特色を傳へた迄であつた。此文章は勿論勉强して學んだものだが、猶鹿兒島の腕力だけで、之を押付けたとは思はれぬ。最初から語脈の一致が有つて。表現の順序が同じかつた上に、社會關係の複雜緻密に爲るにつれて、之を意味する語の不足分を、追々に內地から取寄せて、補充して行く久しい仕來りがあつたから、別に此以外に沖繩一流の文章を、發達させる機會が無かつたのである。

或種の公文には聲を揚げて、文字の無い者にも讀聞かせることが屢あつた。

之を繰返して居るうちに、我々の所謂切口上の如く、文章の語を會話にも採用する。チェンバレン氏の僅かな語彙を見ても、此路を通つて入つて來た、時代時代の癖のある語が中々多い。それを双方で別々に支那から輸入でもしたやうに、又は互に獨立して案出したかの如く、同氏は說き人々は信じて居る。

音韻の變化などは、離れて住めば何處にも起る。一所に住めば又次第に一致して行くだらう。而も今日のやうに新規に使はねばならぬ語が多いと、歩みの遲い學者たちがもう十分に研究したと謂ふ迄、元の形を遺すことは困難であらう。我々から見れば沖繩は言葉の庫である。書物も無かつた上古以來、大略出來た時代の符徵を附けて、入れて置いた品が大抵殘つて居る。此方で損じたものが島では形を完うして居る。それを棚卸しをして引合せて見る爲には、先づ小さな誤解から片付けて行かねばならぬ。

今の正しい首里語なるものに耳を傾けると、律義な九州邊の武士に對するやうな感じがする。彼等の應酬に多く用ゐられた、「尤も」「隨分」「全く」などの副詞が、意外に最初の意味に近く使はれて居る爲であらう。又何々の「やうな」をグトールと謂ひ、何々する「ならば」をドンセーと謂ふ類は、今も存する九州の方言であるが、或は本來の沖繩語かと思ふ程、盛に用ゐられて居る。聽きたいをチ、ブシャン、無いだらうをネランバジと謂ふブシャンやハジも、「欲しい」と「筈」との中世の用ゐ方の儘であるが、我々の俗語が却つて變つてしまつて、今では向ふの方の一つの特色と見られて居る。

「筈」は慥かに弓矢から出た武家の語で、きつと間違はぬと云ふ場合に用ゐたかと思ふのに、現在此方では「だらうと思ふが」位の處に使つて居る。それを忘れてしまつて沖繩人の辭令は婉曲過ぎる、明白な時にもハジと謂つて、斷定の

責任を避けようとするなどゝ、飛んだ批評をする者のあるのは、是も亦一個の小さい誤解である。

我々の悲しまねばならぬ大きな誤解は、元を忘れるのが幸福に生きる手段、通說を批判せぬのが永遠の賢明と思つて居ることである。自分の解說などは誤つて居ても、學問さへ進めばすぐ訂正せられる。あんまり有難くは無いが日本なども、今や小誤解期に入つて居る。丸きり盲蛇のまゝで捨てゝ置かれるよりは少しはいゝ。

二〇　久高の屁

東西古今の屁の文獻の中で、哀絕又艶絕なるものが久高の島に殘つて居る。久高では外間の根人眞仁牛に、女の同胞が二人あつた。姉の於戸兼は外間の祝女で、島の御嶽の御祭に仕へて居た。妹の思樽は巫女であつた。首里に召されて王城の巫女と爲り、日夜禁中に住んで神の御役を勤めて居る中に、國王の御心にかなひ乃ち入つて內宮の人と爲つた。性貞靜にして姿は花よりも更に美しかつた故に、一人の寵愛と幾多の恨み嫉みと、悉く此君の身に集まり、宮中眼を峙てゝ物言交す友とては無かつた處に、どうした惡い拍子であつたか、多勢の居る中で、飛んでも無い不調法な音がしたさうである。

宮女たちは之を聽いて大に悅び、寄ると障るといつ迄も此噂のみをした爲に、

何分にも辛抱して御前には仕へ兼ね、終に御暇を賜はつて故郷の島に還つて來た。さうして久しからずして王子を産んだ。尊貴の御胤なれば、尋常を以て遇するは恐れありと、新に一棟の産屋を建てゝ之を育くみ、御名を思金松兼と附け申すとある。

思金松兼八歳の童子と爲つて、日夜に我父は誰ぞと母に尋ねたまふ。人は皆父ありて生るゝに、我ばかり母一人の子と云ふ道理は無い。必ず之を匿さるゝならば、生きても味氣なしと食事を絶つて、憤り且哭いて御責めある故に、是非も無く昔の宮仕へのつらかつた日の話をした。さりながら田舍の果に人となりたまふも御運である。とても都に出て父の王と御名乘りかはしは叶ふまい。詮も無い素性語りをしなかつたのも其爲と、強ちに諫め申されたが、王子は之に耳をも掛けず、直に伊敷泊の濱に出て、七日の間東を向いて神々に禱られた。

其七日目の夜明け方に、沖の方から光り輝いて、寄つて來る物がある。衣の袖を展べ掬ひ取つて見ると、不思議や黄金の瓜であつた、大に喜んで之を懐にし、母に別を告げて遙々と首里の都の、王城の門の前に立つて、世の主加奈之に對面がしたいと申さるゝ。髪は赤く衣は粗く、姿はしかも氣高い童子が、斯く斯くの次第と聞し召して、何事の願ぞと御前近く呼上げたまふに、懐中よりかの黄金の瓜を取出し、此は是國家の寶、天甘雨を降し沃土已に潤ふの時、曾て屁をしたことのない女をして、此種を播かしめたまふものならば、繁茂して盛んに實を結ぶべしと申上げた。國王大に笑ひたまひ、そんな女が此世に有らうかと仰せられる。然らば屁で御咎めを受ける者も無い筈と、先づ御心を動かし奉る。やがて内院に左右の人を遠ざけ、御尋ねに由つて詳しく久高の母が歎きを言上した。此王他に御子とては無かつた故に、後に思金松兼を世子と定め

たまひ、終に王の位に登つて百の果報を受けたまふと語り傳へて居る。

第五王朝の尙金德王は、卽ち此思金松兼の御事かと云ふ說がある。それでは僅四百四十年程の前であるが、或はもつと古い話であつたかも知れぬ。中山國王が年毎に一度、海を渡つて久高の島の神を御拜みなされたのも此時からで、其例が絕えて後も久しい間、外間の根人と外間ノロは、毎年上つて來て魚を獻じ御目見えをした。其時根人には玉貫(たまぬき)一双、ノロには葉茶と煙草とを賜はるが例であつた。

又尙德王と云ふ若い武勇の世の主が有つた。或年の行幸に、此島の祝女の艶なる色香になづんで、永く逗留ある間に、都は亂れて王妃王子も亂軍の中に失はれ玉ひ、衆に推されて英傑金丸は立つて王と爲る。之を聞いて尙德王は、或は憤つて自ら世を早められたとも謂ひ、或は還御に船覆つて海に隱れたまふとも傳へられる。尙巴志王の花やかな統一事業は、斯うして跡が絕えてしまつた。而も今に至る迄久高の島人が、前朝を慕ふの情は正しく一篇の詩であつた。八十年程前には此島の濱で、網を引いて黃金の菊の花の簪を得た。それを王尙德の遺物とすることに、一人も反對する者が無かつたが、實は簪の制度には變遷が有つたので、是は尙德王以後のものであつた。外間の根人の家には、思金松兼の產屋を今でも保存して居る。母の思樽の衣袴も大切に傳へて居る。はかまと謂ふのは卽ちカヽンであるらしい。白い羽二重のやうな絹であつて、昔に象どつて後に製したので無い證據は、紐に結んだ皺があり、又ほんの少しばかり汚れて居る。卽ち曾ては此美女の溫かい肌を包んだものである。

二一　干瀬の人生

上

干瀬はさながら一條の練絹の如く、白波の帶を以て島を取卷き、海の瑠璃色の濃淡を劃して居る。月夜などにも遠くから光つて見える。雨が降ると潮曇りが爰でぼかされて、無限の雨の色と續いてしまふ。首里の王城の岡を降る路などは、西に慶良間の島々に面して、遙々と干瀬の景を見下して居る。虹が此海に橋を渡す朝などが若し有つたら、今でも我々は綿津見の宮の昔語を信じたであらう。

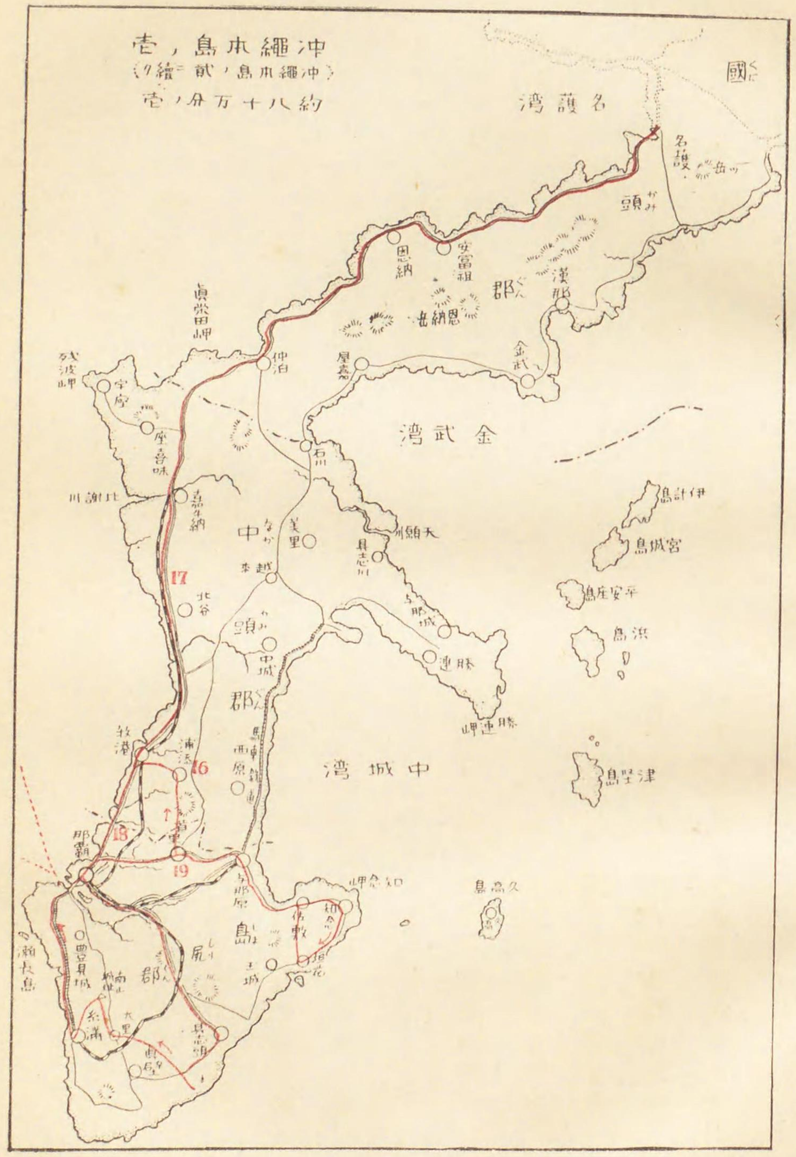
俊寛僧都や成經康頼の輩は、憂ひ憤りに心が亂れてゐた爲か、この大瀬の波を見て泣いたと謂ふ。少なくも平家物語にはさう書いてある。京の小さな陰謀に沒頭してしまつて、島を最も美しく又最も安全にせんとした天の大神の政治には、意を注ぐ餘裕が無かつたのである。何人が見て名けたものか、鬼界と云ふ語も天涯の孤客を刼すに足りた。それに沖繩より北の潮はまだ冷かで、珊瑚の生活が活潑で無かつたものか、大瀬の隱れ岩は海底に潜む魔物のやうに、其脊を只處々に露すばかりであつた。暗夜に海の鳥などが其上に居て鳴くと、馴れたる船人すらも怖れおのゝいたと謂ふから、めゝしい都人にはこの美しさがわからなかつたことであらう。

斯うして久しく疎まれた南方の海にも、尙靜かなる文明の成長は有つた。薩摩の坊津秋目の浦々では、暮春初夏の凪の日に、花瀬見物と名けて小舟を漕ぎ出し、遠く岬の外の澄み透つた潮の底に、青赤黃紫色々の岩の、立ち並ぶ風情を賞美しに行くやうになつた。七島大島でも磯が有れば種々の砂を沖から吹き

寄せて、いつと無く處々の兼久(かねく)(砂原)を作り、今見る多くの村里は其兼久の上に立つた。港の奥が豐饒なる田と爲つたのも、ひる木の林の次第に入江を蔽うて茂つたのも、悉く大瀨が荒海の怒を鎭めた力であつた。殊に沖繩では干瀨と呼ぶ迄に此岩が高く、不斷の白波が島の姿を淨く尊くすることは、恰も佛菩薩の御像に光焰を取附けた如くであつた。而も斯うして外難からは保護せられて居ても、干瀨から内の生活が、やはり亦或時は至つて樂しく、或時は悲しく辛かつた。

世界の海の荒れ狂ふ日には、餘波は寄せ來つて此干瀨を打越した。島ばかりが獨り平穩なるアトールのやうな世中を、維持して行くことは不可能であつた。空と海との縫目の絲も、時あつて綻びざるを得なかつた。日を經て南の風の吹く頃は、遙かなる常夏の國から、椰子の實が流れて來る。之に細工をして瓢に代へ泡盛の芳烈なるものを掬んで樂む中に、次第に島人の心は廣くなつた。沖に出て見ると渡り鳥はどこ迄も飛んで行く。雲より外には又幽かなる次の島の影があつた。小舟にクバの葉などの帆を掛けて、知らぬ島々を見に往く者は、やがて又大きな船を誘うて戻つて來る。岡に登つて送る者待つ者、我と海上に漂ひあるく者も、いつと無く此干瀨の白い波を、眺めては憂苦するやうになつたのである。

寶貝は此あたりの海に、珠や錦よりも尙美麗な、樣々の種類を產する。それを貨幣の用に立てることは、沖繩では知らなかつた。又何處からも求めには來なかつたらしい。絲滿(いとまん)の漁民等は、只其中の大きな一種を採集め、之を刺網の錘(しづ)に用ゐて干瀨の魚を捕り、さうして大に富んで居た。貝の種は盡きないが、人が多くなつて魚が不足する。乃ち友船を誘つて年毎に大海を横ぎり、南は石



垣基隆の浦にも移り住み、或は遙々と唐桑金華山の、寒い磯までをあさるやうになつた。而も故郷が有り家がある爲に折々は還つて來る。さうして又新たなる願を大小の船に積み、港の出入の追々と繁くなるにつれて、風や潮の響も昔の響では無くなつた。干瀬にも色々の悲しい記念が附添はつた。多良間は夢ほどの小さな沖の小島であるが、既に十幾つかの錆た錨が、其干瀬の岩の間に沈み、空しく白波に洗はれて居る。

併し島人が島を出なかつた以前の世の中でも、干瀬と生活との交渉は極めて繁かつた。生れてから死ぬまで死んでから祀られる迄、家々の柱の礎、石垣の石、更に大島などではモヤと名けて、古風な墓の作りには、悉く干瀬の石を引揚げて用ゐて居た。御嶽の靈地もナバ石を以て圍うて居る。ウブの入口には宮古でも八重山でも、特に菊明石の類を弓形に斫つて、小さな石の門を覆うて居

る。濱から運んだ美しい眞砂も、もとは皆干瀬のものである。新しい道路にも之を敷詰めて次第に野山を開いて行く。而して其野山も畠もやはり亦、洪荒の世の干瀬であつた。

下

石垣島の大濱では、西瓦東瓦の兄弟が祀られて居る。カワラは久米島の笠末（かさま）若茶良（わかちやら）などのチャラと同じく、又運天の百ぢ（もく）やなのヂャナと同じく、部落の長を意味した語であらう。此兄弟の瓦の時代までは、八重山には鬪爭と槍奪の他何物も無かつた。獨り彼等が相愛して、平和の草の庵を結んで居た爲に、招かざるに四鄕の男女、來つてこの頭目の傍に居を構へ、遂に集まつて宮良（みやら）白保（しらほ）の二村と爲つた。然らば垣を築き禽獸を防ぐべしと、東は川尻より西は高山まで

仲嵩の靈地を中にして二里の間、始めて五尺の高さに大瀨を積繞らしたと傳へられる。干瀨は此の如くにして此島の神代から、文化生活の爲には必要であつたのである。

併し其以前、人の大に鬪ひ爭つたのも、やはり亦干瀨の上であつた。宮古は珊瑚の島だけに、干瀨が我々の姨捨山に爲つて居る、西銘の主嘉播の親の三人の男子、老いて盲目と爲つた父を疎んじ、魚捕りて慰め申さんと僞り欺いて、沖の干瀨に伴ひ行き、引汐の碆に棚を拵へて、其上で酒宴をした。やがてよい頃を見て各小舟に取乘り、父を殘して還つて來ると、潮は滿ち棚は毀れて、嘉播の親は浪の上に漂うた。島には鱶を神とする多くの昔語が有るが、此時も忽然として大きな鱶は現れ、背に老翁を乘せて安々と濱に送り來る。兄とはちがつて孝行な二人の娘、先づ牛を宰して大魚の勞に謝し、家には人々を集めて歡びの宴を開いた。三人の兄弟は之を聞いて其恥に堪へず。怨は鱶に在りと干瀨をさして漕いで行くのを、盲目の父屋上に出てゝ之を咀へば、一陣の風吹起つて其舟を海に捲入れたと謂ひ傳へて居る。

或時には又干瀨の遊びにかこつけて、仇家の孤兒の心を試さうとした武士があつた。陸で鬪ふならばとても敵すべくも無かつたのを、却て水中に機會を得た爲に、十歳の童子は偶然に親の怨を報いたと謂ふ。但し此話にも類型が尙有つて、必ずしも史實とは認められぬが、此以外にまだ二つ、どうでも此邊の島で無ければ、起り得ぬやうな話が語られて居る。干瀨を見て過ぎる後の世の旅人が、いつかは思ひ出すやうに此序に書いて置かう。

其一つは伊良部の島の漁夫、登佐と云ふ者の話である。登佐にはあでやかなる妻が有つた。或時干瀨に出て此男、岩の穴に手を差入れて蛸を捕らうとする

と、其手がどうしても拔けない中に、潮が大に滿ち來つた。爰で死なねばならぬかと、獨で悲しんで居る處へ、神谷（かみや）の仁屋（にやとく）徳と云ふ者、通りかゝつて之を見付け、私の望を只一つ、許してくれるならば助けよう。命を救ふ禮として、御前の女房を讓つてくれと謂ふのであつた。死ぬよりはましと思つて之を承諾し、二人連立つて戻つて其話をすると、妻は一笑して約束なれば是非も無し、吉日を擇んで婚禮の用意をしたまへと謂ふ。さうして數月を延ばした後に、或日神酒と肴とを調へ、登佐の妻は神谷の徳を招いて、斯う云ふ風な話をした。人の妻を取るのは善いことで無い。さうして唯一時の樂みである。併し約束を破るのも惡いことだ。何と二人で夫婦に爲つたと云ふ歌を作つて、之を島々にはやらせ、約束も破らず男も棄てさせず、さうして登佐と私とは、元の夫婦で居てはどうかと謂ふと、徳も感心して其意見に從ひ、神谷の仁屋が人を助けて、美しい妻を得たと云ふユンタばかり永く殘り、登佐の幸福は元の儘であつたと謂ふ。

第二の話も亦干瀨の蛸に關して居る。石垣の四箇から未申の沖に、馬の齒干瀨と謂ふ怖ろしい岩がある。近い頃の大風の日に、一艘の傳馬船が此近くへ流れたのを、取りに往かうとした刳舟（くりぶね）が先づ覆つた。三人の船頭の二人は行方知れず、今一人も死んだことゝ思つて居ると、風が鎭まつて後に、向ひの竹富（たけとみ）の島から還つて來た。干瀨の上をあるいて自分で上陸したのださうだ。二島の端と端とは一里に近い。引潮に波が見える程の深さであつて、只二箇所ほど泳がねばならぬ切れ目があつた。この長い岩橋の上を、夜の十一時から次の日の午後二時までに、一足づゝ拾つて歩いた。島でインミと稱する海眼鏡をかけて居た。腹がへると蛸を見付けて捕つて食べたと謂ふ。此絲滿にも好い女房があつた。竹富の島から夫の乘つて來る舟が見えると、待遠しさと悅びの餘りに、海

に飛込んで中途まで泳いで迎へに出たと云ふ話である。干瀬の附近には今でもまだ、此樣な生活がいくらも有るらしい。

二二　島布と粟

沖繩の芭蕉布だけは、自ら織つて着る者がまだ多いが、北では奄美諸島の絣の紬、南は先島の紺白の上布などは、殆ど皆他所の晴着となつてしまふのが、昔からの習はしであつた。島の女に布を織らしめる制度は、勿論近世の發明では無いが、其發達の跡を尋ねて見ると、今も遺瀨無い記念が遺つて居る。

以前田舍でよく聽いた子守唄に、七つ木綿の絲の數と云ふのがあつた。單純な村の娘に取つては、經絲の數を算むだけでも、辛氣臭い仕事であつた。それで物の綿々として盡きざることを、之に譬へて歌つたのである。處が南の果の島々へ來て見ると、妹脊山のお三輪が持つやうな緒環を片手にして、小屋の石垣に差込んだ二本の竹の串の間を往來しつゝ、一筋ならべに機の絲を綜て居る。つまりは布一匹の絲の長さだけ、素足で同じ路上を歩かねばならぬのである。僅かばかりの機道具ぐらゐは、工夫し出されぬやうな社會では無いのだが、昔から人の力は俵藤太の卷絹の如く、取れども盡きぬものと考へたのが癖で、斯うして銘も落欵も無く島を出て行く物に、優しい女性の生涯

はてしの無い勞苦
宮古の女の絲をへるところ

を潰させて居るのである。

但し島で上布を織る程の女は、敬はれもすれば又羨まれもした、二十桝の紺縞になると、一反が並の白布の七反分にも評價された。其家は言ふに及ばず、村でも之が爲に貢納が樂になる。それ故に名人の機の傍には、若い娘たちが多く見習ひに遣つて來て、次の代の苦勞の下拵へをした。宮古は今でも藍染の布を誇りとする。布織る女の手は遠くから見ても黔い。是も何とかすれば指を汚さぬ工夫は附くだらうが、凡そ此島で手の眞白な女などは、人中に出ても物を言ふことは出來なかつた。どこの家でも嫁に取らうとしなかつ

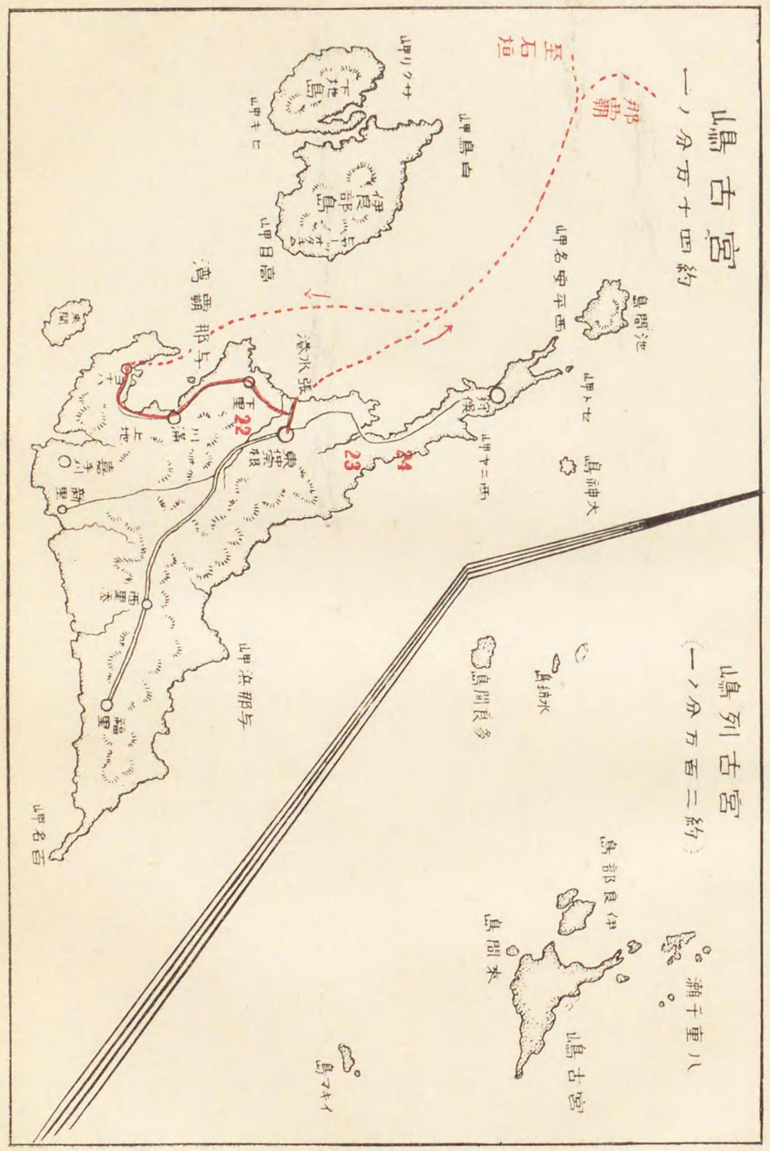
地機にて布を織るところ
八重山白保村の女

た。針突なども同じことで、是が亦女同志の、伊達名聞にも爲つて居たのである。實際に宮古の人の黥には、絣の柄と似た模樣が多い。さうして若い女にも黥をする風が、まだ中々止まぬさうである。亭主に附いて島から外へ出ようとすると、これが何時でも妨げになると謂つて居る。併し他の島でも內地でも、黥をせずとも女はやはり多くは機などを織つて、家にばかり居るのだから、まだ現實の問題とは認められぬ。

甘藷の種の輸入せられる迄、此島では專ら粟を食べて居た。四百年間の人頭稅も、すべて此粟であつて、只布を納め得た者だけが、布に換算することを許された。中山の方でも以前は先島の穀類を以て食料の一部に充てゝ居たのであらうが、シムの世界と爲るに及んでは、澤山の粟は皆酒屋に拂下げられたさうだ。此が本來の泡盛であつて、米で造つた今の燒酎よりは、ずつと辛く又强か

つたと謂つて居る。兎も角も無くて濟みさうな物ばかりの爲に、並の百姓の餘分の骨折は、一通りでは無かつたらしいのに、古くから有る宮古の記錄では、島の土地が餘りに豊沃で、穀類の有餘る處から、人民が放埒で喧嘩爭鬪の止む時が無い。是は何でも大國に御願ひ申し、少し重い年貢でも取立てゝ戴いたら、自然に勤勞の必要を感じて來て、惡い考を起す餘裕が無くならうかと、よくよく思案の後に沖繩に從屬を申出でた、と言ふことに傳へて居る。卽ち最初から現在の民意などは、特に少しも代表せぬ積りの仕事であつたが、記錄は要する に有識階級のものである。沖繩に對する忠臣は同時に、島でも永く恩人として之を仰いで居るやうに、書殘されてあるのである。

さうして役人には課稅の減免があつた。上布の評價にも此人々のみは之に參與した。之に反して布織る女たちの境涯は、元は一つしか改良の途が無かつた。



卽ち若く且面影の淸らかな間に、沖繩から來る高い官吏に愛せられ、子を生んでそれが男であつたら、後に士族と爲ることが出來たのである。尤も士族に爲つても立身をせぬ限り、布はやはり織らねばならなかつた。さうして又今でも織つて居る。勿論今日の勞働は自由であるが、小泉八雲さんの所謂先代のゴストが尙憑いて居る。島の只人が默つて忍んで居る辛勞は幾つか有る。島の布の價は織つてしまつてもまだきまらぬ。商人の知らせて來る相場がどんなでも、そんなに廉くては賣らぬと言ふことは今日でも出來ぬ。布を賣つて買はねばならぬ物が多いからである。粟の耕作は減じ米は始から少ない故に、飲むとすれば泡盛なども買はねばならぬ。宮古諸島は人口が五萬人で、毎年一萬個の酒甕が輸入せられる。此だけの泡盛を父や夫に飲ませねばならぬ。

二三　蘆刈と竈神

老いて目盲ひて子に棄てられ、鱶に救はれ孝女に迎へられた、宮古島のキングリヤ、西銘の主嘉播の親の前半生には、尙三つの傳說が纏綿して居る。それが三つともに大和の中昔を、故郷とするらしいのは如何なる因緣であらうか、

此長者若い時の名は炭燒太良、荒野の草の一つ屋に、獨り炭を燒いて住んで居たのを、守護神の導きあつて幸運の妻を貰ひ當て、終に島隨一の有德人と爲つた話は、以前炭燒長者の研究に於て之を述べた。北は津輕の戸建澤、南部最上の田舍から、中國九州にも行渡つた物語で、分けても豐後の臼杵領の、石佛を以て評判せらるゝ深田の滿月寺、同じく三重の內山觀世音などが、夙くから有名である。

宮古では長者の女房は出戻りであつた。良く無い本の夫とは稚い頃からの約婚であつたが、緣盡きて別れたことに爲つて居る。野崎の長井に住む二戸の民、一人は漁を業とす。曾て前離の干瀨に小舟を漕寄せ、磯に寄木の有つたのを枕として、潮合を待つて居るうちに、半夜に神々の話の聲がする。寄木大氏、今宵は長井の村に、隣同士で子が生れる。いざ參つて運を定めてやりませう。いや此方には來客が有つて、今宵の御伴は致し兼ねる。どうぞ宜しきやうにと斷つて返すと、暫らくあつて以前の神又立寄り、男の方は乞食の運、女の方は產屋の作法にかなつたれば、一日毎に粮七升と述べて還る。漁師は思ひ當ることあつて急ぎ戻つて見ると、我家には男子出產し、隣の家の女の赤兒には、生れると直に額に鍋の墨を附けて居た。心の驚きを包み隱して、斯く時を同じくして生れたのも天緣と、やがて隣同士の緣組を約束した。

此話は他の府縣でも屢聞くが、多くはもう此だけで終つて居る。さうして山の神と道祖神の、御談合と云ふことに爲つて居る。宮古の島で之を寄木の神と謂ふのは、如何にも自然な變化である上に、其話にはまだ續きが有る。此女の兒の名は眞氏、是が後には炭燒太良の妻である。振分髪の夫は放埒で身の運を知らず、或年新麥の初穗祭に、世の習ひの麥粉の供物を庭に投付け、女房に惡口した咎で、愈ユリ(穀靈)と云ふ福神に見放され、妻は離別せられて西銘の村に往つてしまひ、自分は次第に零落して、終に家々の門に立つて、餘りの食物で命を繼いだと謂つて居る。

宮古島では二百年も前から、之を大昔の族長が家の物語として語り傳へ、且色々の異傳をさへ生じて居る。此話が如何して此島だけの歴史とは爲つたか。勿論何人も推斷することは出來ぬが、袋中和尚の琉球神道記には、竈神の由來として、殆ど同樣の話を載せて居る。近江國は甲賀郡、由良の里に住む二人の民と謂つて居る。夜の假宿りに神の話を洩聞いたこと、前夫が無慈悲で好い女房を失つたのも、宮古の古傳と一樣で、而も尚其先の話がある。前夫の名を箕作の翁と謂つた。後に乞食と爲つて長者の家の臺所に來り立ち、施しの食を受けて喰はうとして、ゆくり無く前の妻の姿を見た。悔と恥との情に堪へかねて、終に竈の傍に倒れて死んだのを、長者の夫に見せまい爲に、下人に言付けて竈の後の土を掘つて埋めさせたのが、後には此家の火の神と爲つて、愈長者の福分を豐かにしたと云ふのである。

長者の傳說は殊に斯う云ふ風に、次から次へ續いて行くのが例である。而も神道記の方が遺老說傳よりも百年早く、宮古の方にも鍋の墨を、生れ兒の額に付けると云ふ點に於て、幽かながらも竈の信仰に緣を引くのを見ると、さう古

くから双方別々に、發達した口碑では無いのかも知らぬ。離別の妻の出世談は、今沖縄の組踊に、末めでたしの「花賣の縁」がある。更にヤマトの方では大和物語の時代から、蘆刈の話と云ふものが知られて居た。あしかりけりと云ふ秀句が使ひたさに、之を難波の浦に持つて往つたのかとも思ふが、近江の方でも箕作の翁と謂ふのが、蘆を刈る業體と稍近い上に、豐後の炭燒長者には前の夫の話は少しも無くて、而も又蘆刈某と云ふ子孫の苗字が傳はつて居る。

竈神に醜い神像を作るのは、今尙東北一般の風である。之を火男と謂つたのがヒョットコと爲り、火吹きと謂つたのが潮吹の面に爲つたかと思はれる。善い妻と惡い夫の單純な物語は、此から發生して同じ民族の行く限り、野の果島の果までも、火を焚く度に繰返されたものでは無いか。さすれば南海の沖の島に漂着した昔の物は、獨り平家の落人の口碑のみでは無かつたのである。

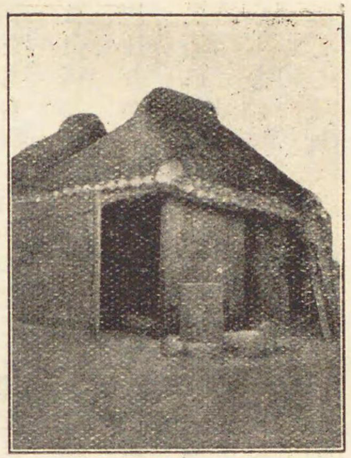
二四　はかり石

南の島では到る所、多くの石敢當（せきかんたう）を見てあるいた。鹿兒島まで還つて來て石敢當の話をすると、其がどう誤つて傳はつたものか。土地の學者の折田翁が、何とも合點の行かぬ點で非難をせられた。自分は口碑も只の石碑と同じく、後には苔蒸し漫漶するものだとは感じて居たが、斯く迄早速には變化しようとは思はなかつた。そこで此序に石敢當の事を報告する。

石敢當の石を建てる風は現に東京にも在る。東京から北にも搜せばあるらしい。長崎には勿論ある。鹿兒島では名物に算する位もある。つまり日本一圓の近世の流行であつた。從つて沖縄縣下の島々に在るものも、何處の眞似とも言ひにくいと共に、唐芋（からいも）同樣に爰が輸入の水口とも謂はれぬ。只此石の文字は支

那から學んだもの、さうして餘り古くからの風で無いことは、推定して置いても大抵よささうに思ふ。

此推定を更に有力にするのは、八重山に於ける自分の實驗であつた。石垣島の四箇村でも、石敢當の立てゝあるのは鹿兒島邊と同じく、丁字路の突當り、人家の表口又は石垣の角などで、石の形にも著しい變化は無いが、たつた一つの珍らしいことは、文字を刻して無い石敢當の有ることだ。是をも土地の人は八重山風に、イシガントウと呼んで居る。年寄や女は又ビジュルとも謂つて居る。是が石敢當の古い名稱と思はれた。或は二つ別々の物を、混同したのでは無いかとも思

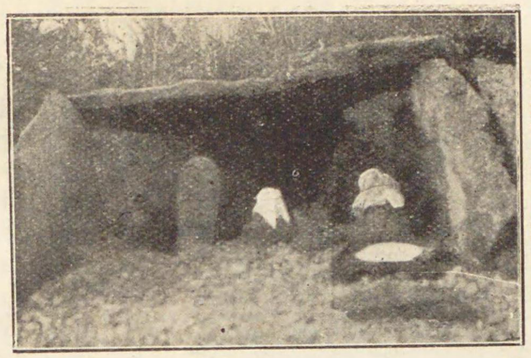


路の角に立つ石敢當

つて見たが、其石の在り處、其高さが二尺と三尺との間で、上の方が少しく細り、頃合の自然石か若くは僅かの人工を加へたものなること双方全く同じで、之に對する信仰も亦同じだ。相異は單に文字の有無で、文字あるものは概して新しい。且つビジュルと云ふ名も、無文の石だけに限るので無い。

沖繩本島にも字を刻せざる石敢當は有つたのかも知れぬが、自分には心附かなかつた。只國頭郡誌を見ると、國頭地方には別にビジュルと名くる信仰上の石があつた。是は內地の村々に在るハカリ石、岐阜縣などで重輕樣（おもかるさま）と云ふのと同樣に、祈願有る者が兩手で持上げ、重さ輕さの感じに由つて、心中の所念が叶ふか否かを卜する爲に用ゐられる。卽ち上古以來の石占である。石占の信仰が絕えて形式のみ殘る地方では、一方には力石と謂つて、一種靑年の運動具と爲り、又他の一方には辨慶の礫石（つぶていし）だの、牛若の背競（せくら）べ石だのゝ傳說と爲つて居

はかり石



國頭郡屋浦のビジユル石
是も三石、右の二つは頭を紙で包む

る。石を靈物として神意を之に問ふのは、日本には普通の習俗だから、其類例を沖繩のビジュルに見出すのは、不思議とは思はなかつた。而も國頭郡誌の著者島袋君などは、ビジュルと石敢當とは別の物だと、今でも信じて居られるさうだ。

處が八重山のビジュルは石敢當である上に、此にはまだハカリ石の信仰が稍遺つて居る。卽ち此石が倒れると雨が降ると信じて居る。之を轉用して雨乞には此石を倒す。內地の方でも村の石占には、晴雨は主要なる一問題であつた上に、石占に用ゐる石は今の石敢當と同じく、魔除の効を具ふる地境の立石が、やはり亦多かつたので

ある。

そこで自分は進んで斯う推論しやうとした。丁字路の衝などに石を立てゝ、目に見えぬ邪神の浸入を防ぐ風習は古く、其石に石敢當の三字を刻する行事は新しい。支那から輸入したのは此文字を彫入れる風だけである。支那でも南部の市邑には弘く石敢當の石が有るが、恐らくは此文字の選定は古いことであるまい。以前は多分魔除けの石神を武神と考へ、朝鮮などの如く石將軍と彫つて居たのが、歷史上の人物にちやうど此場合に似つかはしい、石敢當と云ふ將軍あることを知つて、始めて此文字が流行したのだらう。實在の人であると否とは、迷信者流の問ふ所では無かつた筈である。まづ此だけのことは確かに鹿兒島の史談會で述べた。

又石敢當何人ぞやと云ふことは、如何にして日本に此種の石を建て始めたか

の説明には、ちつとも役立たぬと今以て信じて居る。而して我々の問はんとするは後者である。宮古の東仲宗根（あがりなかそね）の海際の芝生に、ぽつんと一つ文字の無い石が立てゝある。少年を此傍に連れて來て背丈を檢し、石より高く爲つて居たら人頭稅を課し始めたものだと傳へて居る。卽ち是も亦はかり石の一口碑である。石占の方法は重さだけでは無く、或は高い處へ投上げて乘るか落ちるかを試みたり、或は繩などを持つて行つて長さを比べたりもした。其信仰が廢するとこんな說明的の傳說も起る。學者の隨筆の石敢當說も、多くは之に近い附會の說明を信じたものであつたから、顧る價値が無いのである。

二五　赤蜂鬼虎

靜かに考へて見ると、赤蜂本瓦（あかはちほんかはら）も八重山の愛國者であつた。或は少なくとも獨立黨の領袖であつた。處が石垣村の士族には、之を征伐した宮古の勇士の血筋が多かつた。然らざれば反對派の長田大主（ながたおほしゆ）が子孫である。島の記錄は此人々と、中山政廳との間だけに交涉の有つたもので、之と兩立せざる口碑は採用せられなかつた。其上に四百有餘の春秋は此事蹟を蔽うて居る。而も昔の島の酋長にして酒色に耽り下を虐げた者は、赤蜂一人には限らなかつた筈である。他の島々に對しては別に無法を働いたのでも無い。年貢は以前とても納めては居なかつた。尙眞大王の征服欲以外に、自分は彼の所業が叛逆と爲るべき理由を知らぬのである。

赤蜂滅亡して四十年の後、與那國島には又鬼虎の亂なるものが起つた。鬼虎はもと宮古の狩俣村の者で、飢饉の歳に粟一斗で與那國へ賣られたと云ふ說が有る。然らば彼も亦一個外來の簒奪者であつた。附近の諸島が既に王化に潤うてしまふと、斯んな懸離れた島の謀叛人までが征伐を受ける。多くの勇士は功有つて賞せられたと謂ふよりも、寧ろ賞を得んが爲に其功を立てたやうに見える。西表の島の古英雄祖納堂の如きは、身の長六尺猛勇膂力ありとあつて、彼自身が既に赤蜂鬼虎の比であつた。天色淸明の日に高山の峯に登り、遙の西天に小島有つて雲の如く、又霧の如く、波濤の間に隱見するを望んで大に喜び、急に數十人の精兵を船に乘せて、攻めて討取つたのか與那國であつた。其酋長二三人を擒とし、中山に捷を奏して其支配の下に附けたとあつて、結局後援者ある第二第三の鬼虎は子孫迄も繁昌し、孤島は赤蜂が居なくてもやはり征伐せられたのである。

赤蜂は八重山の語では、アカブザーと呼んで居る。ブザーは蜂を意味し同時に又平民を意味して居る。平民と士族との差別の八釜しく爲つたのは、弘治十三年の平定から後の事らしい故に、恐らく先住民の最も永く反抗したものを、ブザーとは呼んで居たことであらう。赤ブザーと本カワラとを、二人のやうに書いた歷史もあるが、其行動の跡を見れば一人である。而してカワラは前にも謂つた如く、島では酋長を意味して居る。

誠に赤蜂は怖るべきカワラであつた。威風赫々たる宮古の仲宗根豐見親すら、一時は謀計を以て欵を之に通じて居た。川平の仲間みちけも終に彼が爲に殺された。後に御嶽の神に爲る程の美宇底獅嘉殿さへ、遠く波照間の島に鋭鋒を避けて猶殺された。獨り長田の大主のみは古見の山に身を潛め、辛うじて時節の

到來を待ち得たけれども、殆ど源頼朝以上の艱苦を嘗めて居る。彼の二人の弟は先づ殺され、美しい妹の二人の中、眞乙姥は助かつたが、古乙姥は赤蜂の妻と爲つて、後に夫と共に誅せられた。政治の不幸が家庭に及んだ點は、我々の戰國時代も同じであつた。

此裏面には又宗教の爭鬪があつた。八重山も沖繩と同じく巫女の神道であつたが、部落の隔絶する如く信仰の系統も別であつた。赤蜂征討の船軍には、特に君南風と稱する久米島の巫女の長を乘組ませ、舳先に立つて朝敵退治の禱を捧げ、將士の勇を勵まさしめたのには仔細があつたらしい、久米島は單に土地の八重山と最も近いのみで無く、互に姉妹の御神を祭ると云ふ傳へもあつて、本島の君々よりは幾分か緣も近かつた。それでも愈四十六隻の中山の兵が、石垣の濱に上陸しようとすると、婦女數十人手に樹枝を持ち、天に號び地に呼ばはり、呪罵萬般にして法術を行ふかと思はれ、味方の士氣も爲に頗る沮んだと記してある。それ故にこそ眞乙姥が忠誠の誠から、無事の凱旋を沖繩軍の爲に禱らうと申出た時にも、一艘たりとも後れて那覇に着くならば、曲事たるべしと云ふやうな難題を掛けた。卽ち彼女を尙赤ブザー方の巫女と、疑つて見たのである。幸ひにして美崎御嶽の神德と、多田屋おなりの助力とに因つて、船は悉く恙無く還つたので、二女は相次で大阿母卽ち巫女の頭に命ぜられ、爰に始めて聞得大君の神道に統一せらるゝことになつた。

而も大濱の百姓たちは、今以て村の殿内に赤蜂を祭つて居る。赤蜂實は死せずの傳說さへさゝやかれて居る。阿蘇の金八坊主が屠られて猶祭らるゝ如く、大隅の大人彌五郎が、祭禮の行列に刀を差して擔ぎ廻られるやうに、鬼ながらも彼は尙慕はれて居る。

二六　宮良橋

八重山の神代は第十五世紀の終、宮古の豐見親が沖縄の兵船を嚮導して、石垣に攻め寄せた時分まで垂れ下つて居る。卽ちこの赤峰の騷亂なるものも、つまりは所謂神々の東雲であつた。島々には二十何所の御嶽があるが、一半は唯祭神の御名に由つて、其由來の至つて古いことを知るのみである。或は又之に事へた美女と英傑との物語も有るが、彼等は既に其信仰を異姓の民に讓つて、遠く雲煙の彼方に去つたものが多い。オーン(嶽)とファオーン(御子嶽)との關係の如きも、今では全く不明に歸して居る。祀る人が屢改まつたからである。

此間に於て活々とした新しい歌が又起つた。節には大昔の人のすさびも遺つ

て居るらしいが、之を承繼いで花やかな粧ひをさせたのは、亦次の代のピラマ(若殿原)であつた。琴は石垣一島に今十四面ほど有る。其中の唯一面が、ヤマトの三越呉服店から取寄せた五尺八寸のもので、他は悉く島の樂人が、島の桐を以て永い間に作り上げた。傳來の名器である。沖縄の制と略同じく、我々の用ゐるものより四五寸も長い。三線の方でも、目下輸入する材料は殆ど蟒蛇の皮ばかりで、何れも黑木其他の堅い材を利用し、島の内で立派な樂器を造つて居る。島人が音律に精しいのは、全く天性であらうと言はれて居る。閑だと云ふだけでは斯んな細工は出來ない上に、此等の樂器の制は共に近昔に、沖縄の方から移したものである。神の發明では無いのである。

實際此島の生活には、せめては新しい歌や樂器を以て、慰問でもしてやりたいやうな不幸が有つた。獨り戰亂の悲しい思ひ出のみでは無い。嵐や海嘯や怖